

〈史料紹介〉

アフマド・イブン・ファドル・アッラー・ウマリー著 『高貴なる用語の解説』 訳注 (12)

谷 口 淳 一 編

はじめに

本稿は、アフマド・イブン・ファドル・アッラー・ウマリー (Aḥmad Ibn Faḍl Allāh al-‘Umārī) 著『高貴なる用語の解説』 (*al-Ta‘rīf bi-al-muṣṭalah al-šarīf* 以下『高貴なる用語』と略) のアラビア語原典からの日本語訳注である。本稿では、al-Droubi の校訂本272頁10行目から293頁2行目までのテキストに対する訳注を掲載する。著者および本書などに関しては、訳注(1)の「はじめに」を参照されたい。

今回訳出した部分は、第6章の残りの部分に相当する。以下、今回訳出した部分の内容を簡単に紹介しておく。まず、前回訳出した駅通路の説明の続きとして、シリア方面への駅通路がカイロから順に宿駅を辿りつつ説明される。駅通の幹線は、シナイ半島の地中海沿岸沿いを通してパレスチナに入り、カラクおよびサファドへ向かう経路をそれぞれ分岐した後、ティベリアス湖の南方でヨルダン川を渡り、北進してダマスカスに至る。ダマスカスからは、ユーフラテス川上流域のビーラと中流域のラフバという辺境へ至る幹線経路が伸びるとともに、ベイルート、バーラバック、トリポリなどシリア各地へと向かう駅通も設けられていた。また、アレppoから分岐する経路とトリポリ州内を巡る駅通路についても記されている。

次に、伝書鳩導入に関する簡単な歴史が述べられた後、マムルーク朝における伝書鳩の経路が記される。上エジプト方面への連絡にはすでに伝書鳩は用いられなくなっており、下エジプト方面とシリア方面については、おおむね駅通路に沿っていた。続いて記されるのは、レバノン山中から集められた氷雪がカイロの城塞へ運搬される経路である。従来は、ベイルートやサイダーあるいはトリポリから船で運ばれていたが、ナスイルの治世になると、ダマスカスからラクダに載せて駅通路を辿ってカイロまで運ぶという方法が併用されるようになった。

その次に、烽火台が説明される。イル・ハーン朝の軍事行動をいち早くカイロへ伝えるために、辺境のビーラとラフバ方面から煙と炎で合図を伝達する制度が整えられていた。ただし、『高貴なる用語』では、ビーラからの経路の部分は、いずれの写本でも欠落しており、ユーフラテス川中流域のアーナからラフバを経てカイロへ至る経路のみが記されている。烽火による伝達はガザまでで、そこからカイロまでは伝書鳩が駅通が用いられた。

最後に、イル・ハーン朝との境域にあって、毎年、草木が焼き払られていた地域についての説明がある。それは、イラク北部のモスル周辺からシリア北部のハーブール川上流域に

広がるバクア地方と呼ばれていた地域で、そこには馬の放牧に適した草原が広がっていた。その草原を焼き払うことによって飼料の入手を困難にし、イル・ハーン朝軍の越境攻撃を防ぐ狙いがあった。このような措置が採られた地域は *muḥriqāt* と称されている。本訳ではこの語を「焼却場」と訳してきたが [訳注 (1) : 31頁 ; 訳注 (11) : 133頁]、上記のような記述内容を踏まえ、訳語を「焦土」と改めることとした。

ウマリーは、上記の諸制度のうち、烽火はすでに廃れてしまったと述べ、焦土も過去に実施されたこととして記しているようである。マムルーク朝初期に設けられたこれらの制度が、『高貴なる用語』が著された14世紀半ばには運用されなくなった様子が見えてくる。13世紀末から14世紀初頭にかけて、十字軍諸国家が消滅しイル・ハーン朝との和平が成立すると、マムルーク朝に対する外敵の脅威は減じていった。その結果、情報伝達制度のうち、軍事情報の伝達が中心であった烽火がまず廃れ、次いで伝書鳩も次第に運用されなくなっていったのである [Silverstein 2007: 179]。

なお、今回訳出した部分については、Richard Hartmann の詳細な訳注があり [Hartmann 1916: 485-510]、前回に引き続き、訳文の検討や地名の比定に際してとくに参照した。

我々は、2003年7月から「イスラーム世界における書記とその伝統研究会」と称して、1年間に10回程度の研究例会（輪読会）を開催し、『高貴なる用語』を読み進めてきた。今回の公刊部分は、2020年3月から2021年3月にかけて実施した計12回の例会（第177回～第188回）で読んだ部分に相当する。この期間の研究例会で訳注作成を担当したのは、伊藤隆郎、岡本恵、近藤真美、杉山雅樹、辻大地、三橋咲歩、柳谷あゆみ、横内吾郎（五十音順）と谷口の9名であるが、さらに篠田知暁が編集作業に携わった。各担当者が作成した訳注を例会で検討し、その修正案を元に全体の原稿を作成した。訳語や表記の統一と最終的な調整および「はじめに」の執筆は谷口が担当した。

訳文中にある〔 〕は、校訂本およびその底本であるL写本の頁の表示と、校訂本に無い語句を補って訳した場合に用いた。また、用語の原語をローマ字で表記する際には、原則として辞書の見出しとなる形（アラビア語の名詞と形容詞は単数形主格、動詞は完了形3人称男性単数）に直して示した。ただし、章節題の表示、単数形にすると意味が変わってしまう語句などは、原文の形に即して転写した。

なお、我々の研究会は、2018年度より科学研究費助成事業基盤研究（B）（一般）「13-15世紀におけるアラビア語文化圏再編の文献学的研究」（代表者佐藤健太郎、課題番号18H00719）の一研究班として活動しており、本稿はその研究成果の一部でもある。

『高貴なる用語の解説』(12)

アフマド・イブン・ファドル・アッラー・ウマリー

[txt. 272; ms. 118b]

ユーフラテス川へと至る道沿いの宿駅¹⁾

保護されしカルアト・アルジャバルからユーフラテス川へと至る〔道沿いの〕宿駅については、以下の通りである。カルアト・アルジャバルからスィルヤークース²⁾へと至る³⁾。〔宿駅は〕以前はウッシュ⁴⁾にあった。それは隔絶した、離れたところであり、ずっと駆使たち (barīdiya) からの不満が出ていたので、それを移転することによって改善された。たとえハーンカーフ・ナースィリーヤ (al-Ḥānqāh al-Nāṣirīya) に隣接する市場とそこにあるものに近くなり、その周辺と〔の繋がり〕が緊密になっただけであるとしても、便利になった。さらにそこからビール・アルバイダー⁵⁾へと至る。さらにそこからビルバイス⁶⁾へと至るが、ここがスルターン⁷⁾の馬のために設けられた最後の宿駅である。それらの馬はスルターンの財によって購入され、馬丁と飼葉が備えられている。

〔その先〕スルターンの馬を引き継ぐのは、馬〔の提供〕のために割り当てられたイクターを保持する遊牧アラブに対して定められている駅通の馬である。[txt. 273] 月初めごとに、その月 (šahr) の当番の者たちがそれぞれの宿駅に馬を連れて来る。その月が終わると、また別の者たちがやって来る。このため彼らは「月当番 (šahhāra)」と呼ばれている。「月当番」はスルターンから派遣されたワーリーが監督する。ワーリーは毎月の初めにその月の当番の者たちの馬を点検し、その馬にスルターンの印を入れる。馬が更新され続ける限り〔この宿駅の制度は〕うまくいく。しかし当番の者が〔自分の馬を提供せずに〕前の者から〔馬を〕借りると、宿駅は機能しなくなる。当番月が終わった者の馬に力が残っている状態で、〔新しい〕月〔の業務〕が始まることなどない。なんと言っても遊牧アラブはめったに飼葉を与えないからである。

-
- 1) 校訂テキストには見出しはないが、読みやすさを考慮して、冒頭部分に準じた見出しを付した。
 - 2) Siryāqūs. カイロ近くの村 [研究篇：268頁]。本文でも言及されているが、この村の近くに、スルターン＝ナースィルが創設したハーンカーフがあった [Šubḥ, v. 14: 376]。カイロから北東に20km。
 - 3) 校訂テキストでは fa min-hā Siryāqūs とあるが、底本 (L写本) をはじめとする諸写本に従って前置詞 ilā (~へ) を補い、fa min-hā ilā Siryāqūs と読んだ。
 - 4) al-‘Uṣṣ. スィルヤークースの北15kmに位置する村。現在はミンヤト・シビーン (Minyat Šibīn) と呼ばれる [研究篇：269頁]。
 - 5) Bi‘r al-Bayḍā’. スィルヤークースとビルバイスとの間に位置する宿駅 [研究篇：269頁]。正確な位置は不明。現代の地図では、スィルヤークースの北北東7km、ビルバイスの南西25kmにイズバト・アルアブヤド (‘Izbat al-Abyad) というやや類似した地名がみえるが、ここに比定すると宿駅間の間隔がかなり不均等になってしまう。
 - 6) Bilbays. カイロの北東50km、イスマーイーリーヤ運河沿いに位置する都市。

遊牧アラブが馬を提供する最初の宿駅は、[ms. 119a] サイーディーヤ⁷⁾である。さらにそこからハッターラ⁸⁾へと至る。さらにそこからカブル・アルワーイリー⁹⁾へと至る。同地では、建物や揚水車や庭園が改修され、まるで村のようになった。さらにそこからサーリヒーヤ¹⁰⁾へと至る。同地は、エジプト地方の定住地域 (ma‘mūr) の最果てである。さらにそこからピール・ガズィー¹¹⁾へと至る。同地の水は別の所にある井戸から引かれたものである。

さらにそこからクサイル¹²⁾へと至る。カリーム・アッディーン・ワキール・アルハーツ・ナースィリー¹³⁾は、かつて同地に隊商宿 (hān) やモスクやミナレット (mi‘ḍana) を建造し、揚水車を設置した。しかし、これらは全て壊れてしまい、改修する者はいなかった。ただし、ミナレットは残っており、そこには灯りのための油が供給されている。このクサイルは、アークーラ¹⁴⁾の名で知られる古い宿駅にほど近い。この宿駅のほど近くにはアーチ橋があり、ナイル川の増水時に溢れ出た水が砂漠へと流出する際に、この橋の下をその水が流れる。

さらにそこから [txt. 274] ハブワ¹⁵⁾へと至る。同地には、水も建物もなく、「月当番」の遊牧アラブの馬が居る場所というだけである。水は、別の所にある井戸から同地へと引かれている。さらにそこからグラービー¹⁶⁾へと至る。さらにそこからカトヤー¹⁷⁾へと至る。さらにそこからサビーハ・ナフラ・マアン¹⁸⁾へと至る。同地の名を呼ぶにあたって、これらの〔三つの〕単語の一つだけを使用する人もいる。さらにそこからムタイリブ¹⁹⁾へと至る。さ

7) al-Sa‘īdiyya. シヤルキーヤ地方にあった宿駅。マムルーク朝の第5代スルターン=ザーヒル・バイバルスがこの村を開発した。地名は彼の息子である al-Malik al-Sa‘īd Muḥammad Baraka Ḥān にちなんでいる [Ramzī, pt. 1: 70]。正確な位置は不詳。

8) al-Ḥaṭṭāra. シヤルキーヤ地方にあった宿駅 [Halm 1979-82: 630-631, Karte 30]。ファークース (Fāqūs) の南方約10km, ビルバイスの北東約40kmに位置する。

9) Qabr al-Wā‘ilī. シヤルキーヤ地方にあった宿駅 [Halm 1979-82: 663, Karte 38]。ファークースの東方約10kmに位置する。

10) al-Šālihīya. シヤルキーヤ地方にあった宿駅。アイユブ朝第7代のスルターン=サーリフがこの町を建設した [Halm 1979-82: 673-674, Karte 38; Ramzī, pt. 2, v. 1: 112-113]。ファークースの東北東約20km, イスマーイーリーヤの北西約30kmに位置する。

11) Bi‘r Ġazī. サーリヒーヤとグラービー (後掲注16参照) の間にあった宿駅 [Ramzī, pt. 1: 185]。ピール (bi‘r) は井戸を意味する。

12) al-Quṣayr. サーリヒーヤとグラービーの間にあった宿駅 [Ramzī, pt. 1: 97]。

13) Karīm al-Dīn Wakīl al-Ḥāṣṣ al-Nāṣirī. 彼については、訳注 (11) 139頁注204を参照せよ。

14) al-‘Āqūla. スエズ運河沿いの都市カンタラの近くにかつて存在した宿駅。ナイル川流域への東方からの入口にあたり、古代エジプトの頃より度々軍事拠点が置かれた。本文で後述されるアーチ橋 (qanṭarat al-ḡisr) は、スエズ運河の開通前まで存在し続けた [“al-Qanṭara,” EI2]。

15) Ḥabwa. クサイルとグラービーの間にあった宿駅 [Ramzī, pt. 1: 222]。

16) al-Ġurābī. カトヤーの西方、ファラマー (al-Faramā) の南方に位置する [Ramzī, pt. 1: 89]。

17) Qaṭyā. 訳注 (10) 42頁注73を参照せよ。

18) Ṣabīḥa Naḥla Ma‘an. カトヤーとワッラーダ (後掲注21参照) の間にあった宿駅 [Ramzī, pt. 1: 305]。

19) al-Muṭaylib. カトヤーとワッラーダの間にあった宿駅 [Ramzī, pt. 1: 112]。

らにそこからサッワダ²⁰⁾へと至る。〔その宿駅は〕最初にあった場所から同地へと移され、そのことで旅行者が脇道へとそれる必要がなくなった。

さらにそこからワッラーダ²¹⁾へと至る。同地は小村であり、マリク・アシュラフ・ハリール——神が慈悲で彼を包み込まんことを——が建立したアシュラフ・モスク (al-Masğid al-Ašrafi) が大通りに面して立っている。このモスクは、道行く人々にとっての憩いの場であり、旅行者が夜を過ごす宿となっている。かつてこのモスクの側に、近衛マムルーク軍団書記 (kātib al-mamālīk) であったファフル・アッディーン²²⁾が宿泊所 (ribāt) を建設したが、彼の死後に売却されてしまった。〔ms. 119b〕

さらにそこからビール・アルカーディー²³⁾へと至る。ワッラーダとビール・アルカーディーの間の距離は非常に長く、道行く人を疲れさせる。さらにそこからアリーシュへと至る。かつて、カリーム・アッディーン——神が彼に慈悲をかけんことを——は同地に水場の揚水車を設置し、堅牢な隊商宿を建造して、善行をなした。この隊商宿には、夜になると人々が避難して、フランク人の襲撃から安全な状態で眠るのである。

さらにそこから前述のハッルーバ²⁴⁾へと至る。同地には前述の揚水車と隊商宿が存在する。近衛マムルーク軍団書記のファフル・アッディーン——神が彼に慈悲をかけんことを——がこれらの施設を建造した。旅行者の安全を守るために彼が下した判断は、アリーシュにあるカリーム・アッディーンの隊商宿 (al-Ḥān al-Karīmī) [が建てられた時] の判断と同じである。同地 (ハッルーバ) は、「月当番」の遊牧アラブの最後の宿駅である。

〔この先〕遊牧アラブの馬を引き継ぐのは [txt. 275] スルターンの馬である。これらの馬には厩舎があり、世話係がおり、スルターンの財で購入され、養われている。その最初の宿駅はザーカ²⁵⁾である。さらにそこからラファフ²⁶⁾へと至る。さらにそこからサルカ²⁷⁾へと至る。以前、駅通〔の宿駅〕は、イチジク桑の木々 (ğummayz)²⁸⁾があり、〔そのために〕「並木 (saṭr)」²⁹⁾と呼ばれているビール・トゥルンターイ (Bi'r Ṭuruntāy) にあった。サルカへの宿駅の移動は、公益のためであった。さらにサルカからガザへと至る。

20) al-Sawwāda. カトヤーとワッラーダの間にあった宿駅 [Ramzī, pt. 1: 72]。

21) al-Warrāda. Ramzī は、カンタラの東方110km に位置するエジプト鉄道のマザール (al-Mazār) 駅に同定している [Ramzī, pt. 1: 124-125]。

22) Faḥr al-Dīn. ナーズィル・アルジャイシュの職を務め、732/1331年に没した [研究篇: 270頁]。

23) Bi'r al-Qāḍī. アリーシュの西方十数 km に位置する [Ramzī, pt. 1: 185]。

24) al-Ḥarrūba. 訳注 (10) 39頁注55を参照せよ。なお、その箇所では揚水車とともに言及されているのは、隊商宿 (ḥān) ではなく給水場 (ḥān sabīl) である。アリーシュの東北東15km に位置する。

25) al-Za'qa. 訳注 (10) 38頁注53を参照せよ。

26) Rafāḥ. 訳注 (10) 38頁注54を参照せよ。

27) al-Salqa. 現在では Wādī にその名が残っている (Wādī al-Salqa) [Hartmann 1910: 691-692]。ガザの南西約15km に位置する。

28) ヤークートの *Buldān* には、ラファフの北方3マイルの地点に、道路の両脇にイチジク桑の木が列をなしている様子が記録されている [“Rafāḥ,” *Buldān*]。

29) Abu-Sitta 2010 [521] に、ハーン・ユニスの前北東数 km の位置に Es Satar という地名と、Wadi es Satar という川の名前が確認できる。

さらにガザからカラクへ向かう場合には、駅通の宿駅であるムラーキス³⁰⁾へと到達する。さらにムラーキスからバイト・ジブリール³¹⁾、さらに神の親友（イブラーヒーム）——彼に最良の祝福と平安があらんことを——の町（ヘブロン）へと至る。さらにそこからジャンバー³²⁾へと至る。さらにそこからサーフィヤ³³⁾へと至る。さらにそこからカラクへと至る。

ガザからダマスカスに向かう場合には、〔最初〕駅通の宿駅であるジーティーン³⁴⁾に到達する。さらにバイト・ダーリス³⁵⁾に到達する。そこにはナスイル・アッディーン・ハズナダール³⁶⁾・タンキズィー³⁷⁾が建てた隊商宿がある。かつて〔宿駅は〕ヤースール³⁸⁾にあり、〔宿駅間は〕遠く離れていた。宿駅が〔バイト・ダーリスに〕移されたことは公益につながった。さらにそこからカトラー³⁹⁾に至る。それは新しい宿駅である。〔ms. 120a〕そこにはタージャーラ・ダワダール・ナスィリー⁴⁰⁾の給水場 (bi'r sabīl) と建物跡 (atar) がある。彼がこの宿駅の新設を命じたのである。〔txt. 276〕ルッド⁴¹⁾とバイト・ダーリス、またはヤースールとの間は遠く離れているため、それによって大きな安らぎ (rifq) が得られることになった。

さらにそこからルッドに至る。さらにそこからアウジャー⁴²⁾に至る。それは街道から外れ

30) Mulāqis. Umm Lāqis の名でも知られる。ヘブロン西方、ガザの東北東20kmに位置する [Abu-Sitta 2010: 468; 研究篇: 270頁]。

31) Bayt Gibrīl. ヘブロン西北西20kmに位置する [Abu-Sitta 2010: 455]。

32) Ġanbā. ヘブロン山地の南方に位置する小村 [研究篇: 270頁]。現代の地図でヘブロン南方約20kmにみえる Jinba という地名に相当するか。

33) al-Šāfiya. 地理書において、死海の南岸に位置する Zugar が属する地区の名称としてその名を確認できる [Le Strange 1890: 292]。現代の地図でカラクの南西28kmにみえる Safi または Ġawr al-Šāfi という地名に相当するか。

34) al-Ġītīn. ガザの北東20kmに位置する村。現在はジーヤ (al-Ġīya) として知られる [研究篇: 270頁; Abu-Sitta 2010: 450]。

35) Bayt Dāris. ガザの北東35kmに位置する村。現在はバイト・ダーラス (Bayt Dārās) として知られる [研究篇: 270頁; Abu-Sitta 2010: 434]。

36) ḥaznadār. 「宝庫の番人」を意味し、ḥāzindār と呼ばれた。マムルーク朝ではバイバルス1世 (在位658~676/1260~1277年) によって正式な役職として導入され、当時は四十人長が任命されていた。後に、ナスイル・ムハンマドによって百人長が任命される12の役職の一つとされた [“Khaznadār,” EI2; “Khāzindār,” EI3]。

37) Nāšir al-Dīn al-Ḥaznadār al-Tankizī. 「タンキズィー」というニスバから、この人物は、マムルーク朝スルターン=ナスイル・ムハンマドの治世にダマスカス総督を務めたタンキズのマムルークであったと考えられるが、詳細は不明。タンキズについては、後掲注64を参照。

38) Yāsūr. ヤッファ (Yāfā) の南約30kmに位置する村 [Abu-Sitta 2010: 418]。

39) Qatrā. ラムラ (Ramla) の南西約15kmに位置する村 [Abu-Sitta 2010: 402]。

40) Ṭāġār al-Dawādār al-Nāširī. ナスイル・ムハンマドによってダワダールに任命された人物。前述のダマスカス総督タンキズとは不仲であった。ナスイル・ムハンマド死後のアミール同士の権力闘争で敗れ、742/1341年に殺害された [Wāfi, v. 16: 378-379; 研究篇: 271頁]。ダワダールという役職については、訳注 (3) 38頁注104を参照。

41) Ludd. パレスチナの古代における主要都市。ラムラが建設された後は衰退した [Le Strange 1890: 493-494]。ラムラの北東3km、ヤッファの南東15kmに位置する。

42) al-ʿAwġā. 研究篇ではヤッファの北を流れる川として紹介されているが [研究篇: 271頁]、本文では地名として用いられている。現在のベタティクバ辺りのことか。Cf. Hartmann 1916: 489, n. 7.

たところにある。もし〔宿駅が〕そこから〔別の地に〕移されていたら、より快適だったであろうに。さらにそこからティーラ⁴³⁾に至る。そこには隊商宿がある。それはナースイル・アッディーン・ダワダール・タンキズィー⁴⁴⁾によって〔その建造が〕始められ、後に別の人物によって完成した。さらにそこからカークーン⁴⁵⁾に至る。さらにそこからファフマ⁴⁶⁾に至る。さらにそこからジーニン⁴⁷⁾に至る。それはサファドへの途上にある。タージャー・ダワダールは、建物が壮麗で、豊かな便益 (naf) を提供する隊商宿をジーニンに建造した。その街道上に、これよりも素晴らしく、堅固で、多くの便益を提供し、美しく飾られたものはない。

そこからサファドに向かう場合、ナイン⁴⁸⁾に到達する。さらにヒッティーン⁴⁹⁾に至る。そこにはシュアイブ⁵⁰⁾——彼に平安があらんことを——の墓がある。さらにそこからサファドに至る。

ダマスカスに向かう場合、ジーニンからザルイーン⁵¹⁾方面へ進路を変える。アイン・ジャールト⁵²⁾を横目に見ながら、その道を下って行く。ザルイーンは新しい宿駅である。かつて遠く離れたジーニンとバイサーン⁵³⁾の間を〔旅する人が〕通っていた山道と比べると、〔宿駅ができたことで〕より大きな安らぎと快適さが得られるようになった。その後ザルイーンからバイサーンに至る。そこからマジャーミー⁵⁴⁾に至る。それは新しい宿駅であり、私が〔その新設を〕命じた⁵⁵⁾。それはサーマ橋 (Ġisr Sāma) の傍にある。バイサーンとザハ

43) al-Tīra. ヤッフアの北東25kmに位置する村 [Abu-Sitta 2010: 315]。

44) Nāsir al-Dīn al-Dawādār al-Tankizī. 先述のナースイル・アッディーン・ハズナダールと同じく、タンキズのマムルークであったと思われるが、この人物についても詳細不明。

45) Qāqūn. トゥールカルム (Tūlkarm) 近くの村。ティーラの北東約15kmに位置する [Abu-Sitta 2010: 301; 研究篇: 271頁]。

46) Faḥma. トゥールカルムの北東17km, ジーニンの南西15kmに位置する村 [Abu-Sitta 2010: 293]。

47) Ġīnīn. ナブルス (Nābulus) の北30km, バイサーンの西20kmに位置する町 [Abu-Sitta 2010: 283; Le Strange 1890: 464]。

48) Nayn. ナザレ (al-Nāšira) 地方の村。ジーニンの北20kmに位置する [Abu-Sitta 2010: 260; 研究篇: 271頁]。

49) Ḥiṭṭīn. タバリーヤ (Ṭabarīya) の西9kmに位置する村。583/1187年にサラディン率いるイスラム軍と十字軍との戦いが行われたことで知られる [研究篇: 271–272頁; “Ḥiṭṭīn,” EI2]。

50) シュアイブについては、訳注(9)29頁注34を参照。

51) Zar‘īn. ジーニンの北10kmに位置する村 [Abu-Sitta 2010: 271]。

52) ‘Ayn Ġālūt. バイサーンの北西10kmに位置する村。658/1260年にキト・ブカ率いるフラグ先遣隊とクトゥズ率いるマムルーク朝軍の戦いが行われたことで知られる [研究篇: 272頁; “‘Ayn Djālūt,” EI2]。

53) Baysān. ジーニンの東20km, ヨルダン渓谷の西に位置する町。果樹園や川, 泉があり, 肥沃な地であった。「大地の舌」とも呼ばれたという [Abu-Sitta 2020: 286; Le Strange 1890: 410-411]。

54) al-Maḡāmi‘. バイサーンの北北東15kmに位置する村。現在は Ġisr al-Maḡāmi‘ として知られる [Abu-Sitta 2010: 263; 研究篇: 272頁]。

55) カルカシャンディーは、本書とは少し異なる表現でウマリーがこの宿駅の新設を命じたことを述べた後で「741年に」という情報を加えている [Šubḥ, v. 14: 380]。本訳28頁参照。

ル⁵⁶⁾の間が遠く離れているため、それによって安らぎが得られるようになった。

かつてその街道はバイサーンからタイイバト・イスマ⁵⁷⁾を経てイルビド⁵⁸⁾に至った。それは極めて困難な道であった。バイサーンとタイイバト・イスマとの間を旅する者は、ヨルダン川 (al-Šarī‘a) を渡河する必要がある。そこには渡し船があるが、馬に乗ってきた者は馬を乗船させることはできない。[ms. 120b] [そのため、] 馬は泳いで渡るしかない。その行程は、とりわけ厳寒のヨルダン川の増水期においては言葉に表すことができないほどの困難を伴うものであった。というのも、川を渡り、ワシの翼ですら切り裂いて進むことが出来ないほどの山道を越えなければならないからである。[txt. 277] 偉大なアミールにしてシャームの守護アルトゥンブガー⁵⁹⁾——至高なる神が彼に慈悲をかけんことを——がその街道を移動させ、現在のようにクサイル・ムーニー⁶⁰⁾経由にした。また、アレppoの駆使たちがヨルダン川で溺死した後、宿駅をタイイバからザハルに移動させた。神がその者の為したことを忘れざらんことを。

741年 (1340-41年) にスルターンの諸門よりシリアへ私が派遣された時に、バイサーンとザハルの間の距離が長く [て不便であると] 思い、私がこの宿駅 (マジジャーミー) の新設を進言して、この宿駅が新設されたのである。

さらに、この宿駅からザハルに、さらにそこからイルビドに、さらにそこからタファス⁶¹⁾に、さらにそこからジャーミー⁶²⁾に至る。[タファスの次の宿駅は、] かつて、ラース・アルマー (Ra’s al-Mā‘) とも呼ばれているデイリー⁶³⁾にあった。そして、偉大なるアミールにして、シャームの守護タンキズ⁶⁴⁾——神が彼に慈悲をかけんことを——がデイリーを所有す

56) *Zaḥar*. 今日でも多くの利用者がいる街道に位置し、*Zaḥar al-‘Aqaba* と呼ばれた [Hartmann 1916: 490, n. 8]。イルビドの西7kmに位置する。

57) *Ṭayyibat Ism*. 単に *Ṭayyiba* と呼ばれることもある [Hartmann 1916: 490, n. 9]。イルビドの西12kmに位置する。

58) *Irbid*. ヨルダン北部に位置する町。一説では、ウマイヤ朝のカリフ=ヤズィード2世が死去した場所として伝えられる [研究篇: 272頁; “*Irbid*,” EI2]。

59) *Altunbugā*. ナースィル・ムハンマドの治世にアレppoやガザの総督を務め、前述のダマスカス総督タンキズ拘束後はダマスカスの総督を務めた ‘*Alā’ al-Dīn Altunbugā al-Hāḡib al-Nāširī* のこと。ナースィル・ムハンマド死後のアミール同士の権力闘争で敗れ、742/1342年に殺害された [*Wāfi*, v. 9: 361-363; 研究篇: 272頁]。

60) *al-Quṣayr al-Mu‘īnī*. ヨルダン渓谷にある村。*Quṣayr Mu‘īn* と呼ばれた [Le Strange 1890: 490]。正確な位置は不明。

61) *Ṭafas*. シリア南部の町ダルアアの北方約12kmに位置する。古代にはユダヤ教徒の集落があった [Dussaud 1927: 345, *carte II-A-2*]。

62) *al-Ġāmi‘*. 正確な位置は不明であるが、1838年の現地調査の記録には、ハウラーン地方のシャイフ・ミスキーン (*al-Šayḥ Miskīn*) の北にある場所として、ジュワイミー (*al-Ġuwaymi‘*) という地名があげられている [Hartmann 1910: 693; Robinson and Smith 1841-42, v. 3: 903]。シャイフ・ミスキーンは、タファスの北東15km、デイリーの南10kmに位置する都市。

63) *al-Dilī*. *Tafas* の北方、約21kmに位置する。*Qanāṭir Fir‘awn* という水道橋の起点 [Dussaud 1927: 515, *carte II-A-2*; “*Qanṭara*,” EI2]。ラース・アルマー (水源) という別名は、このことに由来するのであろう。

64) *Tankiz* [*Sayf al-Dīn Abū Sa‘īd al-Husāmī al-Nāširī*], 740/1340年刑死。712/1312年から740/1340年、ダマスカス総督。タンキズは、ダマスカスをはじめとして、各地に多くのマドラ

ると、その宿駅をディリーからこのジャーミーに移し、かつては遠かったタファストとの距離が短くなり、万事具合がよくなった。さらに、そこからサナメイン⁶⁵⁾に、[txt. 278] さらにそこからガバーギフ⁶⁶⁾に、さらにそこからクスワ⁶⁷⁾に、さらにそこから保護されシダマスカスに至る。

また、ダマスカスからは幾つかの宿駅〔へと至る道〕が分岐している。〔すなわち、〕ダマスカスから、イスラーム王国の東端であるビーラ⁶⁸⁾からラフバへ向かう道を辿りたい場合は、〔いずれもまず〕ダマスカスからクサイル⁶⁹⁾へと至る。さらに、そこからクタイイファ⁷⁰⁾へと至る。そして、そこからは〔道が〕分かれている。

ビーラへ向かう道は、クタイイファからカスタル⁷¹⁾に、さらにそこからカーラー⁷²⁾に、さらにそこからブライジュ・アルアタシュ⁷³⁾に至る。そこは、かつては追い剥ぎの出る道

-
- サや公衆浴場などを建設した。マムルーク朝のスルターン＝ナーシル・ムハンマドとの関係は良好で、息子二人をスルターンの娘と結婚させている。しかしながら、こういった状況は彼に対する周囲からの嫉妬を生んだ。ついには、スルターンから疑惑の目を向けられ、捕縛され、アレクサンドリアの牢獄に送られることになった。740/1340年または741/1340年に処刑され、財産は没収された [Bidāya, v. 16: 290-292; Wāfi, v. 10: 420-435; “Tankiz,” EI2: 研究篇: 273頁]。
- 65) al-Šanamayn. ハウラーン地方にある村。ダマスカスから南南西へ50km, 二日行程。イブン・バットウータも、726/1326年にクスワに滞在した後、ここに向かった [“al-Šanamān,” *Buldān*; Le Strange 1890: 530-531; Dussaud 1927: 334, carte II-A-1; 大旅行記: 2巻14頁; 研究篇: 273頁]。
- 66) Ġabāgib. ハウラーン地方にある村で、サナメインから北方に約15km, ダマスカスの南南西35km。1940年の段階で隊商宿の遺跡が残っていた [“Ġabāgib,” *Buldān*; Le Strange 1890: 441; Dussaud 1927: 334, carte II-A-1; Sauvaget 1940: 18-19, fig. 31; 研究篇: 273頁]。
- 67) al-Kuswa. ダマスカスからエジプトへ向かう最初の宿駅。イブン・バットウータは、726/1326年、ここに停泊したダマスカスからの巡礼団に同行した [“al-Kuswa,” *Buldān*; 大旅行記: 2巻14頁; 研究篇: 247, 273頁]。ダマスカス市街中心部から南南西へ20km。現代の地図では al-Kiswa と表記されている。
- 68) al-Bīra. 現在のトルコ共和国シヤンルウルファ県ビレジク (Birecik)。ユーフラテス川北東岸に位置する。ユーフラテス川がタウルス山脈からメソポタミア平原に流れ出て、船での航行が可能になる場所であり、東方から渡河する勢力に対する防衛の要衝であった。Ġisr Manbiġ のたもとに堅固な城砦があった [“al-Bīra,” *Buldān*; Le Strange 1890: 423; “al-Bīra,” EI2; “Bīredjik,” EI2: 訳注 (11): 124頁]。
- 69) al-Quṣayr. ダマスカスからヒムスへ向かう最初の宿。al-Quṣayr (小宮殿) と呼ばれる大きな隊商宿があった。ダマスカス市街中心部から北東へ15km [“al-Quṣayr,” *Buldān*; Dussaud 1927: carte IV-A-1; Le Strange 1890: 489; イブン・ジュバイル: 355頁; 研究篇: 273頁]。
- 70) al-Quṭayyifa. ヒムスからダマスカスへ向かう場合、Ṭanīyat al-‘Uqāb と呼ばれる山道の手前にある村 [“al-Quṭayyifa,” *Buldān*; Le Strange 1890: 490]。ダマスカスの北東35km。
- 71) al-Qaṣtal. ダマスカスとヒムスの間にある宿駅 [“al-Qaṣtal,” *Buldān*; Le Strange 1890: 483; 研究篇: 274頁]。ダマスカスの北東60km, ナブクの南南西10km。
- 72) Qārā. ダマスカス地方とヒムス地方の境界にあり、ダマスカスからヒムスに向かった場合、ヒムス地方の最初の村。また、ダマスカスとヒムスのほぼ中間地点にある。イブン・ジュバイルは、580/1184年にここを訪れており、その住民がキリスト教徒であることを伝えている。同様に、ヤーカートも、この住民は全てキリスト教徒であると伝えている [“Qārā,” *Buldān*; Le Strange 1890: 478; Sauvaget 1940: 18, fig. 33; イブン・ジュバイル: 354頁]。ダマスカスの北東80km, ヒムスの南60km。
- 73) Burayġ al-‘Aṭaš. カーラーの北方7-8 km。1940年の段階では隊商宿の遺跡が残っていた。ここにナジュム・アッディーン (後掲注74参照) がワクフとして設定したもののうち、貯水池の銘文には、720/1320年 (数字は難読) という年代が示されている [Dussaud 1927: 277-278,

(maqta‘ al-tarīq) で [ms. 121a] 恐ろしい場所だったが、大カーディー＝ナジウム・アッディーン・アブー・アルアッバース・アフマド・ブン・サスラー・タグリビー⁷⁴⁾——神が彼に慈悲をかけんことを——がモスクと貯水池を造った。彼はそこに私有地を持っており、それをその水場へのワクフとし、そこからその貯水池に水を引いた。そうして、恐怖を安全に、寂寞たる様を慕わしさに変えたのである。彼のために神がそのことを忘れざらんことを。

さらにブライジュ・アルアタシュからガスーラ⁷⁵⁾へ至る。そこからはカサブを通過してタラーブルスへと道が分かれているが、その道については後述されよう。さらに、ガスーラからシャムスイーン⁷⁶⁾に、さらにそこからヒムスに至る。そこからはジャーバルへと道が分かれているが、その道については後述されよう。さらに、ヒムスからラスタンに、さらにそこからハマーに、さらにそこからラトミン⁷⁷⁾に、さらにそこからジャラーブルス⁷⁸⁾に、さらにそこからマアツラに、さらにそこからインキラサー⁷⁹⁾に、さらにそこからアバード⁸⁰⁾に、さらにそこからキンナスリン⁸¹⁾に、さらにそこからアレッポに、さらにそこからバーブ⁸²⁾に、さらにそこからサージュール⁸³⁾に、さらにそこから、〔ユーフラテス川〕東岸 (al-barr

carte VI-B-3; Sauvaget 1940: 4-6, figs. 3, 9-11; Hartmann 1916: 492]。

- 74) Naǧm al-Dīn Abū al-‘Abbās Aḥmad [b. Muḥammad] Ibn Ṣaṣrā al-Taǧlibī. 655/1257 – 58年生まれ。723/1323年没。アーディリーヤ、アミーニーヤ、ガザリーヤ等のダマスカスのマドラサで教鞭をとった。695/1295 – 96年にはカーディー・アルアスカルに任命され、702/1302 – 03年にダマスカスのシャーフィイー派大カーディーに就任。死去するまで同職を務めた [Ṭabaqāt/ Subkī, v. 9: 20-22; Wāfī, v. 8: 16-19; “Ibn Ṣaṣrā,” EI2; 研究篇: 274頁]。
- 75) al-Ġasūla. 当地からヒムスまでの移動には1日かかり、大きな隊商宿があった [“al-Ġasūla,” *Buldān*; Le Strange 1890: 441; Dussaud 1927: 510-511; 研究篇: 274頁]。正確な位置は不明。ヒムスの南35kmにあるハスヤー (Ḥasyā’) の近辺と推定される [Hartmann 1916: 492, n. 7]。
- 76) Ṣamsīn. ヒムスの南20km。ヒムスとカーラーのちょうど中間。どちらへも1日の距離 [Dussaud 1927: carte VI-B-2; Le Strange 1890: 535; 研究篇: 274頁]。ペイルート版249頁では Sumnayin, *Subh* [v. 14: 381] では Sumnīn となっている。
- 77) Laṭmīn. ハマー北西約25km。砦がある [“Laṭmīn,” *Buldān*; Le Strange 1890: 493; Dussaud 1927: 207-208, carte VIII-B-1]。
- 78) Ġarābulus. 不詳。
- 79) Inqirātā. マアツラト・アンヌーマーンからアレッポに向かう最初の宿駅であるが、詳細不明 [Hartmann 1916: 35, 493; Dussaud 1927: 185]。
- 80) Abād. イドリブの東25km, アレッポとマアツラト・アンヌーマーンの間に位置する [Dussaud 1927: carte X-B-2]。
- 81) Qinnasrīn. アレッポの南南西25km, クワイク川沿いに存在した都市。アッバース朝時代初期までは地域の中心都市であったが、その後は衰退した [Cornu 1985: carte I-E-2; Le Strange 1890: 486-487]。
- 82) al-Bāb. アレッポとマンビジュの間、マンビジュ寄りに位置し、マンビジュとの間は2マイル。アレッポの北東35km。ブザーア (Buzā‘a) の西の郊外に広がる村落。イブン・ジュバイルは、580/1184年にブザーアを訪れており、ブザーアとバーブの栄えている様子を記している。また、ヤークートは、kibrās と呼ばれる綿織物が織られ、エジプトやダマスカスに輸出されていたと記している [“al-Bāb,” *Buldān*; Le Strange 1890: 406-407; Dussaud 1927: carte XIII-A-3; “al-Buzā‘a,” EI2; イブン・ジュバイル: 341 – 342頁; 研究篇: 274頁]。
- 83) al-Sāǧūr. マンビジュの北北東12km, サージュール川右岸 (南岸) に面した町。トゥーハール (al-Tūḥār) の対岸。サージュール川は、アインターブ地方からマンビジュ地方を流れて、ユーフラテス川に注ぎ込む [Dussaud 1927: carte XIII-B-2; Hartmann 1916: 493, n. 9; Oppenheim 1899-1900, v. 1: Karte “Syrien und Mesopotamien”; “al-Sāǧūr,” *Buldān*; Le Strange 1890: 406, 527; 研究篇: 274頁]。

al-šarqī)にあるビーラに至る。ビーラは、最も栄光に満ちたイスラームの城塞、長きにわたって汚されたことのない最上の要塞である。

ラフバへ向かいたい場合、その道は、前述のクタイイファからイトナ⁸⁴⁾を通り、[txt. 279] ジュライジル⁸⁵⁾に至る。イトナには宿駅はないものの、隊商宿があり、その隊商宿ではパンや履物、また駄獣の蹄鉄といったサダカが配られている。さらに、ジュライジルからマスナー⁸⁶⁾に、さらにそこからカルヤタインに、さらにそこからハイル⁸⁷⁾に、さらにそこからバイダー⁸⁸⁾に、さらにそこからタドムルに至る。そこは、ジンの仕業に由来する驚くべき建て方をされた街である⁸⁹⁾。さらにそこからアラク⁹⁰⁾に、さらにそこからスフナ⁹¹⁾に、さらに[ms. 121b] そこからクバーキブ⁹²⁾に、さらにそこからカワースィル⁹³⁾に至る。そこは今日では機能していない。さらにそこから保護されしラフバに至る。ここと前述のビーラは、既に述べた通り、[イスラーム王国の]東端である。

ダマスカスから分岐している道沿いの宿駅⁹⁴⁾

ダマスカスから分岐している〔道沿いの〕宿駅については、以下の通りである。

-
- 84) al-‘Iṭna. ジャールド (Ġarūd/Ġayrūd) から北東へ1時間ほど向かったところにある小村 [Hartmann 1916: 494; Dussaud 1927: 278, carte XIV-B-3]。クタイイファの北東20kmに位置する。
- 85) Ġulayġil. ダマスカスとの間は二日行程。隊商宿があり、ヤークートは何度かそれを目にしている [“Ġulayġil,” *Buldān*; Le Strange 1890: 466; Dussaud 1927: 279, carte XIV-B-3; 研究篇: 275頁]。正確な位置は不明。
- 86) al-Masna’. 不詳 [Hartmann 1916: 494]。
- 87) al-Ḥayr. タドムルの西南西約60kmに位置する。西ハイル宮殿 (Qaṣr al-Ḥayr al-Ġarbī) の遺跡があることで知られる。これはウマイヤ朝カリフ=ヒシャーム (在位105~125/724~743年) の宮殿で、周辺には浴場、隊商宿、果樹園などがあった [Burns 1992: 196; “Qaṣr al-Ḥayr al-Ġarbī,” EI2; Dussaud 1927: 272, carte XIV-B-3; Hartmann 1916: 494]。
- 88) al-Bayḍā’. ‘Ayn al-Bayḍā’ のこと。タドムルの西25kmに位置する集落。タドムルとハイルの概ね中間にある [Dussaud 1927: carte XIV-C-3; Hartmann 1916: 494]。
- 89) タドムルの建設は、『旧約聖書』『列王記上』9章17節、「歴代誌下」8章4節では、ソロモンの事業の一つとして挙げられている。アラブの地理書には、ソロモンのためにジンが建てたという話があることが記されているものもある [“Tadmur,” EI1; “Tadmur,” *Buldān*; 大旅行記: 7巻142頁]。
- 90) Arak. タドムルの東北東30km、アレppo砂漠の辺縁に位置した小さな町。ナツメヤシとオリブの産地 [“Arak,” *Buldān*; Le Strange 1890: 395]。
- 91) al-Suḥna. シリア砂漠の小さな町。アラクの北東40km。ヤークートはアラブが住むと伝え、イブン・バットゥータは、その町の住民の大部分がキリスト教徒であること、またその水が熱いことが町の名前の由来であるとし、町に浴場がいくつもあって、暖房用に屋上に湯を置くと伝えている [“Suḥna,” *Buldān*; Le Strange 1890: 539; Dussaud 1927: 251, 260, carte XIV-C-3; 大旅行記: 7巻140, 142頁]。
- 92) Qubāqib. シリア砂漠にある水場、宿駅。ここ以外、周辺に水場はなかった [Le Strange 1890: 488; Dussaud 1927: 252-253, carte XIV-D-2]。現代の地図ではデイルアズールの南西50kmに Bi’r Ġabāqib という地名が確認できる。
- 93) Kawāṭil. 位置不詳。ヤークート・ハマウィーは、イラクからシリアへ至る途上にある地名と記し、それ以上詳しい位置は説明していない [“al-Kawāṭil,” *Buldān*; Le Strange 1890: 483]。
- 94) 校訂テキストには見出しはないが、読みやすさを考慮して、冒頭部分に準じた見出しを付した。

ダマスカスからブライジュ・アルフルース⁹⁵⁾、ウライニバー⁹⁶⁾、ヌーラーン⁹⁷⁾を経てサファドに至る。

ダマスカスからはハーン・マイサルーン⁹⁸⁾、ズィブドウル⁹⁹⁾、フサイン¹⁰⁰⁾を経てバイルートにも至る。前述のハーン・マイサルーンからは、ジャッズィーン¹⁰¹⁾を経由してサイダーにも至る。ハーン・マイサルーンからはまた、ピカーのワリーの居所であるカラク・ヌーフ¹⁰²⁾——彼（ノア）に平安があらんことを——に至り、そこからバーラバックに至ることもできる。

サイダーからバイルートへ行こうとするならば、1宿駅分の距離であることを知るように。

ダマスカスからはザバダーニー¹⁰³⁾を経てバーラバックにも至る。そこからヒムスを目指す場合は、バーラバックからカサブに向かい、ガスーラに至る。そこ¹⁰⁴⁾からトリポリを目指す場合は、そこからカサブに向かい、そこからカダス¹⁰⁵⁾に、そこから [txt. 280] アクマー

95) Burayġ al-Fulūs. 不詳。諸写本でこのように綴られているが、Hartmann は近くに Marġ al-Fulūs という地名が見られるので、Murayġ al-Fulūs と読むべきであるという [Hartmann 1916: 494; Popper 1955: 50]。

96) Uraynibā. クナイティラの北東 9 km に位置する。Dussaud の地図では Oreiniba と記されている [Dussaud 1927: carte I-D-1]

97) Nu‘rān. サファドの北東 20 km に位置する。Dussaud の地図では Nou‘aran と記されている [Dussaud 1927: carte I-C-2]。

98) Ḥān Maysalūn. ダマスカスの北西 20 km, アンティ・レバノン山脈の中に位置する地名。Dussaud の地図では Khan Meitheloun と記されている [Dussaud 1927: carte III-D-3]。

99) Zibdul ないし Zibdil [Wild 1973: 211; Dussaud 1931: 60; Popper 1955: 50]。現代のローマ字表記は Zebdol。ピカー高原の主要都市ザフレ (Zahle) の南西 6 km, レバノン山脈の東麓にある地名 [Dussaud 1927: carte III-C-2]。ダマスカスからバイルートへ向かう道は、ここからレバノン山脈へと登っていく。校訂テキストでは *Ṣubḥ* [v. 14: 382] に基づいて Zubdān とされているが、諸写本で z-b-d-l と綴られている。また、ヤークート・ハマウィーによれば、Zubdān はダマスカスとバーラバックの間にあり、後出のザバダーニーのことではないかという [“Zubdān,” *Buldān*]。

100) al-Ḥuṣayn. バイルートの南東約 20 km に位置する。Dussaud の地図では、レバノン山脈越えの街道沿いの都市アレイ (Aley) の南東 2 - 3 km の地点に Ḥoṣein という地名がみえる [Dussaud 1927: carte III-B-2]。

101) Ġazzīn. サイダーの東 20 km, レバノン山脈南部の都市。現代のローマ字表記は Jezzine。

102) Karak Nūh. レバノン山脈の東麓に位置する村で、預言者ノア (ヌーフ) の墓とされるものがある [“Karak Nūh,” EI2]。現在はザフレ市の一地区である。

103) al-Zabadānī. ダマスカスの北西 30 km, バラダー川上流域に位置する。

104) 「そこ」が指す地名がバーラバックかガスーラのいずれであるかは、カサブの位置が明確でないため、判断できない。

105) Qadas. ヒムスの南西 25 km, ヒムス湖に注ぐアースイー (オロンテス) 川沿いに位置する。ヤークート・ハマウィーは、ヒムス湖をカダス湖と呼んでいる。古代エジプト王国とヒッタイトが対戦した場所としても知られる [「カデイシュ」「カデイシュの戦い」『古代オリエント事典』; Dussaud 1927: 106-107, carte VI-B-2; “Buḥayrat Qadas,” “Qadas,” *Buldān*]。

ル¹⁰⁶⁾に、そこからシャーラー¹⁰⁷⁾に、そこからアルカー¹⁰⁸⁾に、そこからトリポリに至る¹⁰⁹⁾。

ダマスカスからトリポリへは、ヒムス〔に至る道〕の宿駅を前述のガスーラまで行き、それからカサブに至り、あとは述べた通りである。

ダマスカスからジャーバルへは、ヒムス〔に至る道〕の宿駅を経て、ヒムスからサラミーヤに、そこからブガイディード¹¹⁰⁾に、そこからスーリヤー¹¹¹⁾に、そこからハッス¹¹²⁾に、そこからジャーバルに至る。そこからラース・アルアイン¹¹³⁾を目指す場合は、ジャーバルからアイン・ブザール¹¹⁴⁾に向かい、そこからスイフラーン¹¹⁵⁾に、そこからハーブール¹¹⁶⁾に、〔ms. 122a〕そこからラース・アルアインに至る。

ダマスカスからマサーフへは、ヒムスまでの宿駅を経て、ヒムスからマサーフに至る。

ダマスカスからカラクへは、タファスまでの宿駅を経て、そこからクナイヤ¹¹⁷⁾に、そこからブルジュ・アブヤド¹¹⁸⁾に、そこからフスバーンに、そこからズイーバーン¹¹⁹⁾に、そこからラッバ¹²⁰⁾に、そこからカラクに至る。

ダマスカスから南区域のワーリーの〔居所にある〕宿駅へは、タファスまでの宿駅を経て、そこからアズリアート¹²¹⁾に至る。

以上が、各方面へのダマスカス〔からの道沿い〕の宿駅すべてである。ワーリーたちの居所についていえば、それらのうちいずれの一つからも次のところへと駅通を利用して旅をし、

106) Aqmār. ヒムスの西南西30km に位置する Ġisr al-Qamar に比定される [Dussaud 1927: 106, carte VI-A-1]。

107) al-Ša‘rā. トリポリの北東40km, カピール川の北側に位置する [Dussaud 1927: 106, carte V-B-1]。

108) ‘Arqā. トリポリの北東20km に位置する [Cornu 1985: carte I-D-3; Dussaud 1927: carte V-B-2]。

109) B写本では、シャーラーの後、min-hā ilā m-’ l-š-l-š ‘Arqā tumma min-hā ilā al-Ġisr tumma min-hā ilā Ṭarābulus と続く [f. 93b]。

110) Buġaydīd. サラミーヤの東北東70km に位置する [Dussaud 1927: carte XIV-B-2]。

111) Sūriyā. ラッカの西20km, ユーフラテス川右岸 (南岸) に位置する [Dussaud 1927: carte XIV-C-2]。

112) al-Ḥaṣṣ. 不詳。

113) Ra’s al-‘Ayn. ユーフラテス川の支流ハーブール川の上流沿い, ハサカの北西80km に位置する。シリアとトルコの国境によって南北に分断され, 今日に至っている。

114) ‘Ayn Buzāl (?). B写本では Buzāl [f. 93b], S2写本では ‘Ayn b-d-’l [f. 156b]。不詳。

115) Šihlān. 不詳。

116) al-Ḥābūr. 不詳。ユーフラテス川に注ぐハーブール川沿いの地名であろう。

117) al-Qunayya. サナマインの南6km, ダルアー (アズリアート) の北45km に位置する。Dussaud の地図では Qouneye と記されている [Dussaud 1927: carte II-A-1]

118) al-Burġ al-Abyaḍ. 不詳。

119) Ḍībān. アンマンの南南西50km に位置する。底本を含め諸写本では, w-s-’-ḥ, Dībāġ などと綴られていたり, 欠落したりしていて, 不明瞭であるが, 校訂者および Hartmann によって Ḍībān ないし Dībān [“Dībān,” EI1] に比定されている [校訂: 280頁注12; Hartmann 1916: 497, n. 4]。ヤーカート・ハマウイーは Dībyān と記している [Le Strange 1890: 438; “Dībyān,” *Buldān*]。

120) al-Rabba. カラクの北10km に位置する。

121) 南区域のワーリーの居所は, アズリアートにあった [訳注 (11): 119頁]。

目指すところに到達できるようになっている。

アレppoからの道沿いの宿駅¹²²⁾

アレppo〔からの道沿い〕の宿駅については、そこからビーラまでは既に述べた。ビーラは、最も栄光に満ちた境域であり、そこを人々の道が通っている。

それ以外についていえば、アレppoからサムカ¹²³⁾に、そこからサンドラー¹²⁴⁾に、そこからバイト・アルファール¹²⁵⁾に、そこからインターブに、そこから〔txt. 281〕バハスナー¹²⁶⁾に、そこからカイサーリーヤ¹²⁷⁾およびドゥループ地方、すなわち現在ルーム地方と呼ばれる地方へと入る。最近我々は、その地方のうちカイサーリーヤとダランダ¹²⁸⁾を〔領土に〕加えた。ただし、周知の確定したことは、この方面におけるイスラーム王国の端がバハスナーだということである。

インターブから、〔ms. 122b〕ユーフラテス川が足首飾りの〔ように城下を流れる〕カルアト・アルムスリミン¹²⁹⁾へは1宿駅分の距離であることを知るように。そしてカルアト・アルムスリミンからジスル・アルハジャル¹³⁰⁾に、そしてカフターに至り、そこが〔さきほどとは〕別の方面における〔イスラーム王国の〕端である。

アレppoからはアルハープ¹³¹⁾に、そこからティーズィーン¹³²⁾に、そこからヤグラ¹³³⁾に、そこからバグラースにも至る。そこはアルメニア人の国に接する地域の端であったが、近年我々は新たに領土を加え、〔端が〕バグラースからバーヤース¹³⁴⁾に移った。バーヤースは、アルメニア人の馬〔に乗り替える〕最初〔の宿駅〕であり、それからアーヤースに至る。アーヤースは現在、付加されたジャイハーン川流域征服地の首邑である。

アレppoからはジャップールに、そこからバーリスに、そこからジャーバルにも至る。

122) 校訂テキストには見出しはないが、読みやすさを考慮して、冒頭部分に準じた見出しを付した。

123) al-Samūqa. アレppoの北25kmに位置する。現代の地図では Sammūqa と表記されている。

124) Sandrā. Hartmann は Samandere と推測している。Samandere はアザースの東25kmに位置する [Dussaud 1927: carte XII-C-2]。現代の地図では Şandara と表記されている。

125) Bayt al-Fār. 不詳。

126) Bahasnā. インターブ (ガズィアンテブ) の北東80kmに位置する。トルコ共和国アドウヤマン県ベスニ (Besni)。

127) Qaysārīya. トルコ共和国中部の都市カイセリ (Kayseri) [“Ḳaysariyya,” EI2]。

128) Daranda. マラティヤの北北西75kmに位置する。古くは Ṭuranda または Ṭaranda と呼ばれた [“Ṭuranda,” *Buldān*; Le Strange 1905: 120]。トルコ共和国マラティヤ県ダレンデ (Darende)。

129) Qal‘at al-Rūm の別称 [訳注 (11): 124–125頁]。

130) Ğisr al-Ḥağar. 不詳。

131) Arḥāb. アレppoの西30kmに位置する [Dussaud 1927: carte X-B-1]。

132) Tīzīn. アレppoの西45kmに位置する。Tūzīn と呼ばれる [Cornu 1985: carte I-D-1; Dussaud 1927: carte XII-B-3; Le Strange 1890: 547]。

133) Yağrā. バグラースの東に広がっていた湖または湿地帯に面していた [Le Strange 1890: 42, 436-437]。正確な位置は不明。

134) Bāyās. イスケンデルンの北20kmに位置し、地中海岸に面する。Cornu の地図では Bayyās [Cornu 1985: carte I-D-1]。イスケンデルンまで約1日行程 [Le Strange 1890: 422]。トルコ共和国ハタイ県パヤス (Payas)。

以上が、アレppo〔からの道沿い〕の宿駅すべてである。その他の城塞、ワーリーたちの居所についていえば、それらのうちのひとつから別のところへ、あるいはこれら〔上記の〕諸道の支路から〔行くことができる〕。

トリポリからの道沿いの宿駅¹³⁵⁾

トリポリ〔からの道沿い〕の宿駅については、以下の通りであることを知るように。

〔まず〕トリポリからマラキヤ¹³⁶⁾に向かい、そこからブルニヤース¹³⁷⁾に、そこからラーズィキヤに至る。この都市には、地中海で最も素晴らしいと言われている港がある。かつて、カリーム・アッディーン¹³⁸⁾はこの港を整備し、活性化 (*idāra*) しようとした。ところが、彼について〔運命として〕予め書かれていた出来事に見舞われたため、既にその事業に取り掛かろうと鑿に片足を掛けていたのだが、取り止めたのであった。[txt. 282]

次いで、ラーズィキヤからサフユーン¹³⁹⁾に至る。これは栄光に満ちた城塞であり、〔同地の〕支配者 (*mutamallik*) の館でもあった。マリク・カーミル・スングル・アシユカル¹⁴⁰⁾は、〔かつて〕アリーシュとユーフラテスの間の地域を支配していたが、その後〔マンスール・カラーウンに〕敗れ、この地に立て籠もった。また、我々のスルターン〔=ナーシイル・ムハンマド〕が〔カイロに〕戻り、ムザッファル・バイバルス・ジャーシュニキール¹⁴¹⁾が篡奪していた〔スルターン位〕を奪還した後、ムザッファル・バイバルスはサフユーンに隠居することを〔許すよう〕願い出たのであった。

次いで、サフユーンからバラートゥヌス¹⁴²⁾に至る。これは有名な城塞の一つである。サフ

135) *marākiz Ṭarābulus*.

136) *Maraqīya*. タルトゥースの北18km, ブルニヤースとの間に位置する地中海沿岸の城塞。十字軍時代には同勢力の支配下にあったが、684/1285年にカラーウンによって征服され、マムルーク朝の支配下に入った〔研究篇：277頁；Cornu 1985: 9, *carte I-C-2*; Dussad 1927: *carte VII-A-3*; Le Strange 1890: 502; “*Ḳalāwūn*,” EI2〕。

137) *Buluniyās*. 地中海沿岸、マラキヤの北15km, ラーズィキヤの南約50kmに位置する町。今日のバーニヤース。古代より港市の一つとして栄え、十字軍時代にはムスリム勢力と十字軍勢力の抗争の場となった。カラーウンが684/1285年に征服した〔研究篇：277頁；Le Strange 1890: 424; “*Bāniyās*,” EI2〕。

138) *Karīm al-Dīn*. 訳注 (11) 139頁注204を参照。

139) *Ṣahyūn*. ラーズィキヤの東北東25kmに位置する〔Dussad 1927: *carte IX-A-3*〕。訳注 (11) 128頁注117も参照。

140) *al-Malik al-Kāmil Sunqur al-Aṣṣar*. バフリー期に活躍したマムルーク。カラーウンの即位後に反旗を翻し、677/1278年ダマスカスにてスルターンを自称したが、679/1280年カラーウンに敗れた。692/1292年に獄死〔研究篇：278頁；“*Dimaṣṣ*,” EI2〕。

141) *al-Muzaffar Baybars al-Ġāṣṣnikīr*. ブルジー・マムルーク出身のマムルーク朝スルターン (バイバルス 2 世)。在位708~709/1309~1310年。709/1310年、ナーシイル・ムハンマドが3度目の登位を企図して挙兵した際、バイバルス 2 世は退位を条件にサフユーン城塞の支配をナーシイル・ムハンマドに願っていた。その後、シリアに逃亡するも捕らえられ、709/1310年に獄中にて暗殺された〔研究篇：278頁；“*Baybars II*,” EI3; Mazor 2015: 142-143〕。

142) *Balāṭunus*. ラーズィキヤの東28km, サフユーンの南南東10kmに位置する。現在の *Qal‘at al-Muhāliba* (*Muhaylba*, *Mehelbe* とも記される) [“*Balāṭunus*,” EI2; Dussad 1927: 150, *carte VII-B-1*]。

ユーンからはバルザヤ¹⁴³⁾に至ることもできる。同地は砦であり、〔ms. 123a〕これを建てたか、あるいはこれを支配していたことで知られる人物の名前が付けられている。また、バラートゥヌスからウツライカ¹⁴⁴⁾に至ることもできる。同地は教宣の城塞群¹⁴⁵⁾のうち、トリポリ地方に最も近い城塞である。そして、ウツライカからカフフ¹⁴⁶⁾へ、そこからカドムース¹⁴⁷⁾へ、そこからハワービー¹⁴⁸⁾へ、そこからルサーファ¹⁴⁹⁾へ、そこからマサーフ¹⁵⁰⁾に至る。以上がトリポリ〔からの道沿い〕の宿駅の全てである¹⁵¹⁾。

ワーリーたちの居所についていえば、それらのうちの一つから別のところへ〔行くことができる〕。この説明を終えたことにより、保護されし王国にある駅通の宿駅全てに関する説明を終える。

我々の王国の辺境から、フラゲー族の王権があるイル・ハーン朝宮廷 (Ḥaḍrat al-Urdū) へと至る〔道程〕に関しては、ウーラク馬¹⁵²⁾とヤーム馬¹⁵³⁾と呼ばれる〔馬が用意された〕

143) Barzaya. ラーズィキーヤの北東45km, アンサーリーヤ山地東麓とガープ低地の間に位置する城塞。12世紀初頭以降、十字軍の支配下にあったが、584/1188年にサラーフ・アッディーンが奪取した。校訂テキスト及び *Ṣubḥ* では Burzayh とあるが、*Buldān* では Barzūya, *Taqwīm* では Barziya と記されており、表記のゆれが見られる。*Buldān* には、一般的に Barzaya と呼ばれていたとあることから、ここではバルザヤという表記を採用した。現在では Bourzey と表記されることが多く、別名マルザ城 (Qal‘at Marza) と呼ばれる [“Barzūya,” *Buldān; Taqwīm*: 260; Cornu 1985: 7, carte I-D-2; Le Strange 1890: 421; “Barzūya,” EI2]。

144) al-‘Ullayqa. 校訂テキスト及び諸写本ではクライア (al-Qulay‘a) とあるが、ペイルート版 253頁及び *Ṣubḥ* [v. 14: 385] ではウツライカ (al-‘Ullayqa) と校訂されている。また、トリポリ地方の城塞群について説明した節では、バラートゥヌス、サフユーンに続いて、ウツライカが教宣の城塞群の一つに数えられており、クライアは別の項で説明されていることから〔校訂: 260頁; 訳注 (11) : I28頁〕、当該箇所は al-‘Ullayqa の誤りであると考えられる。ウツライカは、バーニヤースの東15km に位置する [Dussaud 1927: carte VII-B-2]。

145) Qilā‘ al-Da‘wa. 訳注 (11) I27頁注111を参照。

146) al-Kahf. タルトゥースの北東25km, ウツライカの南南西15km に位置する [Dussad 1927: carte VII-B-3]。

147) al-Qadmūs. バーニヤースの東南東20km, カフフの北東 8 km に位置する [Dussad 1927: carte VII-B-2]。

148) al-Ḥawābī. タルトゥースの北東15km, カドムースの南西20km に位置する [Dussad 1927: carte VII-B-3]。

149) al-Ruṣāfa. マサーフの数 km 南西に位置する。20世紀後半に現地調査を実施した P. Willey は、ルサーファの位置を “about 10 km from Masyaf” と記している [Willey 2005: 128]。Dussad の地図でマサーフの南西 5 km の位置にみえる Resafi/Rissafi という地名 [Dussad 1927: 142, carte VIII-A-3] がこのルサーファに相当すると推定される。

150) Maṣyāf. アンサーリーヤ山地南部の東麓、ヒムスの北西50km に位置する。その城塞は、シリアのイスマーイル派 (ニザール派) が拠った「教宣の城塞群」の中で中心的な存在であった [Le Strange 1890: 507; 訳注 (11) : I28頁]。

151) 以上、トリポリからマサーフに至る宿駅は、一続きの駅通路で結ばれているかのように記されているが、サフユーンからマサーフまでについては、掲載順序が宿駅の隣接する順になっていない箇所があり不自然である。したがって、サフユーン以降の部分については、ウマリーが示す順路に従って駅通が運用されていたとは考えにくい。

152) ḥayl al-ūlāq. ウーラクはモンゴル帝国下の駅通で利用された駅馬 (ūlāq)。馬の他に、ロバ、ラバ、ラクダなどが用いられていた。原語はトルコ語の ulay ないしモンゴル語の ula‘a [本田実信 1991: 295頁; “Ulaq,” EI2]。

153) ḥayl al-yām. ヤームはモンゴル帝国下で施行された駅通。モンゴル語の jam に由来する。各駅には使者の往来と情報伝達のため、人員・駅馬・飲食物・宿舎等が設けられていた [本田実

宿駅があり、これらの馬が運搬に利用されている。〔馬は、〕スルターン¹⁵⁴の財によって購入されたり賄われたりするのではなく、エジプトなどの砂漠に〔設置されている〕遊牧アラブの諸宿駅のように、その土地の人々に課されている。神は成功を授ける者である。〔txt. 283〕

伝書鳩の拠点¹⁵⁴

最初に我々が述べることは以下の通りである。これはモスル地方¹⁵⁵から始まり、エジプトのファーティマ朝カリフたちが維持してきた。彼らは〔制度の整備に〕大いに尽力し、伝書鳩の登録簿¹⁵⁶を特別に作成したり、血統表 (ğarā'id bi-ansāb) を特別に作成したりするほどであった。また、ファーディル・ムフイー・アッディーン・ブン・アブド・アッザーヒル¹⁵⁷は、これについて『鳩の護符』 (*Tamā'im al-Ḥamā'im*) という本を著した。

伝書鳩に関心を持ち、モスル¹⁵⁸から導入した最初の王¹⁵⁹は、シャヒード・ヌール・アッディーン・マフムード・ブン・ザンギー¹⁶⁰——神が彼に慈悲をかけんことを——であり、それは565 (1169–70) 年のことであった。

以下のことを知るように。エジプトにおける伝書鳩〔の拠点〕について、〔現在〕その経路 (tadrīğ) は上エジプト方面で途絶えているが、かつてはクースやアスワン、そしてアイザーブにまで達していた。しかし今日では、以下のもの以外は残っていない。

〔まず、〕カイロからアレクサンドリアに至る行程、カイロから〔ms. 123b〕ディムヤートに至る行程、カイロから巡礼者の道に沿ってスエズに至る行程、そしてカイロからシリアへの中継地点であるビルバイスに至る行程がある。

また、ビルバイスからサーリヒーヤに、サーリヒーヤからカトヤーに、カトヤーからワツ

信 1991 : 295頁 ; “Yām,” EI2]。

154) marākiz al-ḥamām. *Ṣubḥ*, v. 14: 392-394; “Ḥamām,” EI2を参照。

155) Balad al-Mawṣil. バグダードから400km 上流のチグリス川西岸にある都市モスルを中心とした地域。

156) dīwān. Hartmann, Ragheb, Silverstein は、これを「(伝書鳩の) 官庁」と訳出している。また Ragheb は、伝書鳩の官庁が存在したことを示唆する例として、アッバース朝カリフ＝ナースイルの時代に、伝書鳩の血統の登録簿を扱う官職 (kātib šarā'ig al-tuyūr al-ḥamām) があったことを指摘している [Hartmann 1916: 500; Ragheb 2002: 68; Silverstein 2007: 123]。しかし、ウマリーを始め、カルカシャンディーヤやザーヒリーは「dīwān があった」と述べるにとどまり、これ以上の説明をしていない [*Ṣubḥ*, v. 14: 390; *Zubdat kašf*: 117]。また管見の限りでは、ファーティマ朝期に伝書鳩を扱う専門の官庁があったことを示す史料も見当たらないことから、ğarā'id という語と並んでいることも鑑みて、ここでは dīwān を「登録簿」と訳出するのが妥当と判断した。

157) al-Fāḍil Muḥyī al-Dīn b. 'Abd al-Zāhir. 訳注 (4) 35頁注12を参照。

158) 校訂では al-w-ṣ-l と書かれているが、バイルート版及び底本を含む諸写本では al-Mawṣil とあることから、誤植と思われる。

159) 諸写本では awwalu man i'tanā bi-hi min al-mulūki と書かれているが、校訂283頁5行目では min が抜けており、脱字と思われる。諸写本に従って読む。

160) al-Šahīd Nūr al-Dīn Maḥmūd b. Zankī. ザンギー朝君主。在位541~569/1147~1174年。アレppoとダマスカスを拠点として、シリア統一と対十字軍戦争を推進した [“Nūr al-Dīn Maḥmūd b. Zankī,” EI2]。

ラーダに、ワッラーダからガザに至る行程がある。

そしてガザからは神の親友（イブラーヒーム）——彼に祝福と平安があらんことを——の町（ヘブロン）に至る行程、あるいはガザから高貴なるエルサレムに至る行程、あるいはガザからナーブルス¹⁶¹⁾に至る行程、あるいはガザからルッドに至る行程がある。そしてルッドからはカークーンに、カークーンからジーニーンに至る。そしてジーニーンからはサファドに至る行程、あるいはジーニーンからバイサーンに至る行程がある。そしてバイサーンからはイルビドに、イルビドからタファスに、タファスからサナメインに、サナメインからダマスカスに至る行程がある。

そしてこれらの各拠点からは、〔txt. 284〕その各々に隣接する重要な場所に至る行程がある。例えばバイサーンやタファスからアズリアートに至る、大ワーリー（wālī al-wulāt）との連絡に用いるための行程である。

またダマスカスからは、伝書鳩はバーラバックあるいはカーラー、あるいはカルヤタインへ送り出される。

カーラーからはヒムスに、さらにそこからハマーに、さらにそこからマアッラに¹⁶²⁾、さらにそこからアレppoに至る行程がある。そしてここからはビーラに至る行程、あるいはカルアト・アルムスリミーニに至る行程、あるいはバハスナーに至る行程、あるいはアレppo周辺のその他の重要な場所に至る行程がある。

カルヤタインからはタドムルに、さらにそこからスフナに、さらにそこからクバーキブに、さらにそこからラフバに至る行程がある。しかし現在はスフナからクバーキブに至る経路は廃れている。スフナに届いたタドムル〔から〕の短信（biṭāqa）はクバーキブに〔駄獣によって〕運ばれ¹⁶³⁾、その後クバーキブからラフバへと伝書鳩（ḡanāh）で送られるようになったのである。

以上でイスラーム王国全域の伝書鳩の拠点に関する説明は終わりである。神にこそ成功あり。

氷雪を運搬するラクダの拠点¹⁶⁴⁾

そこにラクダが集められるのは、〔ms. 124a〕ダマスカスからカルアト・アルジャバルのスルターンの御前へと運搬される時のみである。そうしたことは、我々のスルターン——神

161) Nābulus. サマリア地方の中心都市。エルサレムの北50kmに位置する。

162) B [f. 95a], D1 [f. 178b], D2 [f. 113b], Ld [f. 80b], S1 [f. 187a], S2 [f. 159a], Sh [f. 154b] の各写本では、この後にも「さらにそこから ... に (min-hā 'ilā...)」と記されているが、具体的な地名部分は空白になっている。

163) Hartmann はタドムルからクバーキブの区間では、伝書鳩は用いられず陸路で郵便物が運ばれていたとする [Hartmann 1916: 501]。また Ragheb も当該区間では馬が用いられるようになっていたと記し、それを712/1312-13年のモンゴル軍によるラフバ城包囲の失敗以降のことだと推測している [Ragheb 2002: 34]。

164) marākiz huḡun al-talḡ.

が慈悲で彼を包み込まんことを——の治世に始まり，〔今も〕続いている習慣の一つである。これ以前は特にバイルートやサイダーといったシリアの境域（港）から，海路でのみ運搬されていた。ビカーとバーラバックにはこの両地へ補助を行うことが課されていた。〔運ばれる氷雪は〕かつては僅かであったが，後に多くなった。そこでジュッバト・ブシャッリー¹⁶⁵とムナイティラ¹⁶⁶に割当てられた分が，トリポリ〔から運搬されるよう〕に決められた。〔txt. 285〕

地中海から船がデムヤートに着くと，その氷雪はナイル川を経てブーラク¹⁶⁷の岸に荷揚げされる。そこから，スルターンのラバに乗せられて高貴なる飲料貯蔵庫に運ばれ，そのために設けられている貯水槽に貯蔵されるのである。

氷雪は，現在では陸路と海路とで運ばれている。運搬が手配される期間は，ハズィーラーン月からティシュリーン・サーニー月¹⁶⁸の終わりにかけてである。〔その期間中に〕陸路で運搬される回数は71回で，間を置かず次々と運搬されるのだが，〔その数は〕それよりも増えてきた。1回の運搬ごとに氷雪を担当する（*tadarraka*）駆使が付けられる。また氷雪の運搬や取り扱いに熟練した者（*tallāg*）も付けられ，彼はもう1頭の駆通の馬に乗せられていたが，ある時に管轄地の馬に乗せられるよう定められた。1回の運搬ごとに5つの積み荷が用意される。それぞれの拠点には6頭のラクダが〔置かれるよう〕定められており，5頭は運搬用，1頭はラクダ騎手用である。

〔その行程は以下の拠点を経る。〕ダマスカスからサナメインに，さらにそこからタファスに，さらにそこからイルビドに，さらにそこからバイサーンに，さらにそこからジーニーンに，さらにそこからカークーンに，さらにそこからルッドに，さらにそこから〔txt. 286〕ガザに，さらにそこからアリーシュに至る。ここまでがシリア州の担当と定められた〔拠点である〕。ただしジーニーンは〔ms. 124b〕サファドの担当と定められている。〔行程は〕さらにアリーシュからワッラーダに，さらにそこからムタイリブに，さらにそこからカトヤーに，さらにそこからクサイルに，さらにそこからサーリヒーヤに，さらにそこからビルバイスに，さらにそこから保護されしカルアト〔・アルジャバル〕に至る。ワッラーダから

165) *Ġubbat Bšarrī*. トリポリのおよそ南東25kmに位置するブシャッリーを中心とした，レバノン山脈北部に位置する地域。その山中の溪谷部には，迫害から逃れたマロン派キリスト教の修道院が多くあり，17世紀までは信徒のコミュニティの中心的役割を果たしていた〔Popper 1955: 17; Winter 2010: 66, 93; “Bsharrā,” EI2〕。マロン派の視点からの中世レバノン史を扱った Salibi によると *Ġubbat* とは，山岳地方を意味するシリア語の *geb* に由来した語である（Salibi は *Ġibba* と表記している）〔Salibi 1959: 38, n. 4〕。

166) *al-Munayṭira*. レバノン山脈に発しジュバイル（ビプロス）の南6kmの地点で地中海に注ぐイブラーヒーム川（*Nahr Ibrāhīm*）の上流にある地名。バイルートの北東40km〔Dussad 1927: carte III-C-1〕。

167) *Būlāq*. ナイル川東岸に位置する，カイロ市の街区。マムルーク朝期には，ナイル川に面するカイロ近郊の港として，下エジプト交通の要衝としての役割を担った〔研究篇：278頁；“*Būlāq*,” EI2〕。

168) ハズィーラーン月（*Hazīrān*）はシリア暦の3月，ティシュリーン・サーニー月（*Tiṣrīn al-tānī*）は8月で，ユリウス暦やグレゴリオ暦では，それぞれ6月と11月にほぼ相当する。

カルアト〔・アルジャバル〕までのラクダの拠点は、スルターンのラクダ舎に属するもので、その費用はエジプトの財源から支払われる。以上が〔氷雪を運搬する〕ラクダの拠点のすべてである。

海路で派遣される船の数については、ザーヒル・バイバルスの治世以降年間3隻で、それを越えることはなかった。我々のスルターンの3度目の統治¹⁶⁹⁾の始めまではこの通りであった。その後その数は増加し始め、シリアとトリポリの両州からの船が11隻になるまでになった。時にはこの数を越えていたが、その後は不要ということで数が減らされた。現在¹⁷⁰⁾これに関して私が知っているところでは、7隻から8隻¹⁷¹⁾がシリアから求められており、トリポリには支援以外のことは課されていない。そうしたことはみな、その時々の違いや需要に応じている。〔氷雪が〕送り出されるときには、氷雪を取り扱う者たちとともに、担当の者も一緒に出発する。氷雪を携えて海路にて船で到着した者たちは、駅逡を用いて陸路で戻っていく。

凍りついた氷雪が得られ、それを十分に押し固めたうえで、〔txt. 287〕空気に触れないようにしなければ、多くの氷雪が到着することはない。空気は水よりも氷雪を早く溶かすからである。〔駄獣の〕背に載せて運ばれるものが定められると、その中から飲料専用のものが確定する。というのも、これが最終的には最も清潔かつ安全に到着するからである。ただし、会議長¹⁷²⁾と〔ms. 125a〕スルターン飲料貯蔵庫長官¹⁷³⁾および貯蔵庫係(ḥāzin)たちの同席の許で、〔氷雪運搬のために〕派遣された者(mutasaffir)たち全員が毒味をする¹⁷⁴⁾。

海路で運搬されてくる氷雪は、上記以外のために用いられる。それを供される者には、下賜や恩賜¹⁷⁵⁾に関する確定した規則と継続してきた慣例が適用される。その全てについては、適宜の箇所にて注記した。

以上でエジプトおよびシリアのイスラーム王国全体の諸拠点に関する説明は終わりである。

烽火台¹⁷⁶⁾

それは、タタールが戦争や襲撃のために侵入すべく我が国に向かってきた場合、その動き

169) ナースィル・ムハンマドによる3度目の統治期間(709~741/1309~1341年)。

170) 校訂ではḥ-rとなっているが、L写本に従いāḥirと読んだ。

171) 校訂ではal-maṭāniyaとなっているが、L写本に従いal-ṭamāniyaと読んだ。

172) amīr maḡlis. 宮廷の内科医、眼科医に関わる事項などを管轄した。政権内での地位を次第に高め、14世紀後半には有力アミールが就く職の一つとなった〔五十嵐大介 2011: 30頁: “amīr madjlis,” EI2〕。

173) šādd al-šarāb-ḥānāh al-sultāniya. スルターンに供される食料・飲料を扱う部署を監督する武官職〔al-Baqlī 1983: 194〕。飲料貯蔵庫については、訳注(4)45頁にも言及がある。

174) aḥaḍa al-ḡāšnī. ペルシア語のčāšnī giriftan(味見、試食する)に由来する表現であろう。

175) al-ḥal‘ wa al-in‘ām. 直訳すると「名誉の衣を与えることと恩恵を与えること」となる。ここでは、両者を合わせて下賜一般という意味に解し「下賜や恩賜」と訳した。なお、「恩賜」と訳した語を校訂ではal-an‘āmと読んでいるようだが、バイルート版258頁に従って上記のように読んだ。

176) al-manāwir.

を知らせるために、夜は火を灯し昼は煙を焚く場所である。これらの火を灯したり煙を焚いたりする際には、報告対象である敵を見てさまざまな状況を知らせるため、ある場合は数、ある場合はそれ以外といったように、状況ごとに異なる合図がある。各烽火台（manwar）には、彼らの前〔の烽火台〕からくる合図を視認し、次〔の烽火台〕へ示すために、見張り¹⁷⁷⁾と監視者（nazzār）が配置されている。彼らには、この任務のために定められた給与¹⁷⁸⁾があり、それは絶えず潤沢であった。しかし、至高なる神が〔マムルーク朝とイル・ハーン朝〕両勢力を和解させ、双方が安全になって以来、上記の事柄に対する注意は疎かになり、留意されなくなった。

上述の烽火台は、山頂にある場合もあれば、高い建物にある場合もある。それらの場所はよく知られており、ほとんどの旅行者が知っているほどである。[txt. 288] [烽火台の連なりは] ビーラやラフバなどイスラーム〔王国〕の最果ての境域からカルアト・アルジャバルのスルタンの御前へと至る。そして、ユーフラテス川における朝の新情報は、夕刻にはスルタンの御前に伝えられ、夕刻の新情報は翌朝に伝えられていた。

ビーラからの経路は…¹⁷⁹⁾。[ms. 125b]

ラフバからの経路は、以下の通りである。まずアーナ¹⁸⁰⁾の市街で忠実な者たち（qawm）が、烽火以外の¹⁸¹⁾口実を設けて火を灯すことになっていた。我らの諸王に対する彼らの愛情をアーナの民は黙認していたのである。さて、その火または煙はヒルバト・アッルーム¹⁸²⁾とさらにジュルフ¹⁸³⁾でも視認される。すると、その両地またはどちらか一方で烽火が上げられる。そして、両地いずれにおける烽火もワーディー・アルハイカル¹⁸⁴⁾で視認される。すると、そこで烽火が上げられる。そして、それがカナーティル¹⁸⁵⁾で視認されると、カナーティルで烽火が上げられる。そして、それがラフバ——神がそれを守らんことを——で視認されると、そこで烽火が上げられる。そして、それがカワースイルで視認されると、そこで烽火が上げられる。そして、それがクバーキブの監視所で視認されると、そこで烽火が上げられる。そして、それがハフィール・アサド・アッディーン¹⁸⁶⁾で視認されると、そこで烽火が上げられ

177) dayādib. sg. daydabān. ペルシア語の dīdibān（見張り、観測者）に由来する語 [“daydabān,” EI2]。

178) ḡawāmika. sg. ḡāmakiyya. ペルシア語の ḡāma（衣服）に由来する語。元来は公職への就任に際して与えられる衣服を意味したが、すでにセルジューク朝では給与という意味で用いられていた [“djāmakiyya,” EI2]。

179) 多くの写本でこの後に数行から半葉程度の空白がある [校訂：288頁注5]。原本でも空白になっていたのであろう。

180) ‘Āna. イラク共和国アンバール県、ユーフラテス川中流西岸にある都市。直線距離でラフバの東南東150km、バグダードの西北西250kmに位置する。

181) 「烽火以外」と訳した箇所は、校訂テキストでは *amr yaswī al-tanwīr* と読めるが、諸写本に倣い *amr siwā al-tanwīr* と読んだ。

182) Ḥirbat al-Rūm. 「ルーム（ローマ）の遺跡」の意。位置不詳。

183) al-Ġurf. 「切り立った岸」「崖」の意。位置不詳。

184) Wādī al-Haykal. 「寺院の谷」の意。位置不詳。

185) al-Qanāṭir. 「橋」「堰」を意味する語の複数形。位置不詳。

186) Ḥafir Asad al-Dīn. 「アサド・アッディーンの穴」の意。位置不詳。

る。そして、それがスフナで視認されると、そこで烽火が上げられる。そしてアラクの監視所でそれが視認されると、そこで烽火が上げられる。そして、アラクとタドムルの間の石橋であるブワイブ¹⁸⁷⁾でそれが視認されると、そこで烽火が上げられる。[ms. 126a] それがタドムルの監視所で視認されると、そこで烽火が上げられる。そしてそれがバイダーの監視所で視認されると、そこで烽火が上げられる。そしてそれがハイルで視認されると、そこで烽火が上げられる。そしてそれがジュライジル¹⁸⁸⁾で視認されると、そこで烽火が上げられる。そして [txt. 289] それがカルヤタインで視認されると、そこで烽火が上げられる。そしてそれがイトナで視認されると、そこで烽火が上げられる。そしてそれがサニーヤト・アルウカーブ¹⁸⁹⁾で視認されると、そこで烽火が上げられる。

そしてそれが花嫁のミナレット¹⁹⁰⁾で視認されると、そこで [ダマスカス] 周辺各地に対し、臣民たちに警報を發し軍¹⁹¹⁾を召集するために烽火が上げられる。ダマスカス周辺では、バルザ¹⁹²⁾を見下ろす山で烽火が上げられる。そしてそれがマーニー¹⁹³⁾で視認される。するとそこで烽火が上げられる。そしてそれがクタイイバ¹⁹⁴⁾村の丘で視認される。するとそこで烽火が上げられる。そしてそれがトゥッラ¹⁹⁵⁾で視認される。するとそこで烽火が上げられる。そしてそれがイルビドの山¹⁹⁶⁾及びアジュルーン山地¹⁹⁷⁾で視認される。するとそこで烽火が上げられる。そしてそれがタイイバト・イスムの山で視認される¹⁹⁸⁾。するとそこで烽火が上げられる。

187) al-Buwayb. Hartmann も言及しているが、名称・位置も含めて詳細不明 [Hartmann 1916: 505]。

188) ジュライジルはダマスカスからカルヤタインに至る途中にある [本訳: 31頁]。したがって、上記の烽火の経路の説明では、ジュライジルはカルヤタインよりも後にくるべきであり、ウマリーの記述順は不自然である。

189) Ṭāniyat al-‘Uqāb. ダマスカス北部へと通じる山道。イブン・ジュバイルは、同地で道はヒムスへ向かう道とサマーワ経由でイラクに通じる道の二手に分かれ、また同地からダマスカスの平地とゲータが見渡せると記している [Le Strange 1890: 545; イブン・ジュバイル: 355頁]。

190) Mi‘danat al-‘Arūs. ダマスカスのウマイヤ・モスク北壁に位置するミナレットの名称 [Hartmann 1916: 505; Le Strange 1890: 230]。

191) atrāf. sg. taraf. Hartmann の訳及び Dozy の語釈に従い「軍」と訳した [Hartmann 1916: 505; Dozy, v. 2: 38]。

192) Barza. ダマスカス近郊ゲータ地方の村 [Le Strange 1890: 420; 研究篇: 279頁]。現在の行政区分ではダマスカス市内北部に位置する。

193) al-Māni‘. ダマスカス南方ハウラーン地方の山 [Hartmann 1916: 505]。クスワ (キスワ) の南東 5 km ほどの所に位置する [Dussaud 1927: carte II-A-1]。

194) al-Kutayyiba. サナマインの 10km 余り南に位置する [Dussaud 1927: carte II-A-2]。

195) al-Ṭurra. イルビドの北方にある村 [研究篇: 280頁]。イルビドの北東 15km, ダルアアの西北西 10km に位置する。

196) Ġabal Irbid. イルビドについては、前掲注 58 を参照。

197) Ġibāl ‘Aġlūn. 現在のヨルダン北部に位置する山地。584~589/1188-89~1193年頃にアイユーブ朝によって築かれた城塞で知られる [Humphreys 1977: 77; Le Strange 1890: 388-389; 訳注 (11): 120頁注 36]。イルビドの南南西 20km, ジャラシュの北西 15km に位置する。

198) L 写本 (底本) 及び S1 写本 [f. 190a] には fa-yunawwaru (烽火が上げられる) と記述されているが、前後の記述との整合性も考慮し、Sh 写本 [f. 158a] の記述 fa-turā (視認される) を採用した。

そしてそれがバイサーンへと裾野が広がる山の頂上にある井戸の対面に造られた烽火台で視認される。その山はアカバト・アルバリード¹⁹⁹⁾と呼ばれているが、現在、駅通の経路はそこから外れている。その烽火台からはイブズィーク²⁰⁰⁾山地及びその周辺にかけてのナーブルスの諸地域 (aṭrāf a‘māl Nābulus) が見渡せる。アカバト・アルバリードの頂上にあるこの烽火台から烽火が上げられる。そしてそれがカルヤト・ジーニン²⁰¹⁾として知られる山で視認される。するとそこから烽火が上げられる。そしてそれがファフマの山で視認される。するとそこから烽火が上げられる。そしてそれがカークーン〔城塞〕の最上階 (šurfa) で視認される。するとそこから烽火が上げられる。そしてそれはナーブルスの諸地域で見えるが、烽火の経路上では、マジュダル・ヤーバー²⁰²⁾に隣接する山の頂上で視認される。するとそこから烽火が上げられる。そしてそれがヤースールの宿駅で視認される。ただし、現在、駅通〔の経路〕はそこから外れている。するとそこから烽火が上げられる。そしてそれがガザを見下ろす山地で視認される。そしてガザでは「ガザの丘」と呼ばれる丘の頂で烽火が上げられる。それから先は烽火台がなく、烽火ではなく伝書鳩 (ḡanāḥ) と駅通のみで情報が伝えられる。〔ms. 126b〕

さて、以下のことを知るように。これまで我々が述べてきたもの全ては、〔主要な〕烽火台である。そしてそれらからさらに東西南北の諸国へと続く街道の本道から外れたところへ分岐していく。これらの烽火台は、現在は消滅してしまった制度であり、その魂である灯火が消えてしまった抜け殻である。その制度の火を消し、烽火台を不要とするまでの安寧をもたらした神に称えあれ。神にこそ成功あり。〔txt. 290〕

焦 土²⁰³⁾

かつては、この土地への関心が第一にあった。その地は、我らの国土に接する東方の境界にあり、かの王国（イル・ハーン朝）の内側に位置する。かつて、その地の作物や草木を焼き払うための〔マムルーク朝側の〕人員が用意されていた。その地は肥沃な土地であり、〔モンゴルの〕部族民が〔我らの〕国土へと進軍する際に、彼らの馬に十分な牧草地を提供した。それゆえ、彼らを弱体化させ、彼らの活動を鎮めるためにその地が焼き払われたのである。なぜならば、彼らの慣例では、馬の飼料を負担〔して運搬〕することがなく、大地が育てるものに委ねていたからである。土地が肥沃であれば、彼らはそこを進み、土地が痩せていけば、彼らはそこを避けたのである。彼らは土地を焼き払った〔マムルーク朝側の〕意図に気づいていなかったが、その後、〔イル・ハーン朝に〕へつらう人々が彼らに知恵を授けたため、彼らはその地で追い剥ぎをするようになり、それらの〔マムルーク朝の〕辺境を

199) ‘Aqabat al-Barīd. 「駅通の山道」の意。位置は不詳。

200) Ibzīq. ナーブルス山地とヨルダン川の間、ナーブルスの北東約20kmに位置する。

201) Qaryat Ġmīn. 「ジーニン村」の意。ジーニンについては、前掲注47を参照。

202) Maḡdal Yābā. カークーンの南南西約30km、ラムラの北北東20kmに位置する村。

203) al-muḥriqāt.

掌握するようになった。このために、多くの人々が殺害され、その地〔を焼き払った〕火以上に激しい炎で焼き殺された。

かつては、毎年この焦土のためにダマスカスの宝庫から大金が投じられ、その地には屈強な人員が用意されていた。火を付ける際に彼らにとって大事なことは、野ギツネと追い立て役の犬を帯同することであった。それから、このために用意された人員は、信頼できる助言者とともに山の洞穴や谷底に潜伏する。強風の吹き荒れる日まで月日が経過すると、[txt. 291] かのキツネ [ms. 127a] と犬の尻尾に火〔の付いた松明²⁰⁴⁾〕が、しっかりと²⁰⁵⁾ 括り付けられる。それから、キツネが解き放たれる。直後に犬が腹を空かされた状態で解き放たれる。こうしてキツネは懸命に逃げて、犬は懸命に追いかける。すると、通ったところに火が付き、風が火をその近くへと広げていくのである。これに加えて、闇夜や薄暗い日の夕暮れには、人員自らが〔火を〕投擲していた。我らの僚友は、このことが有効であり、〔イル・ハーン朝による〕辺境の急襲と境域の攻撃に対する防備になると見なしていた。

以上が焦土というものである。それは、バクア²⁰⁶⁾ 地方にある。すなわちアルド・アルバクア (Arḍ al-Baq‘a), サルサール²⁰⁷⁾, クナイヤ²⁰⁸⁾, バーシャツザ²⁰⁹⁾, ハッターフ²¹⁰⁾, マシュハド・イブン・ウマル²¹¹⁾, ムワイリフ²¹²⁾ にある²¹³⁾。またニネヴェ²¹⁴⁾ 地方にある。この地方は、現在モスルに帰属している。ニネヴェは古くからの名声を保持し、アミタイの子ヨナ (Yūnus b.

204) Hartmann 1916 [507] が指摘するように、ここで示されている土地を焼き払う手法は、『旧約聖書』のサムソンの物語に類例を確認することができる [聖書：士師記15章4-5節]。ウマリーの文章ではキツネや犬の尻尾に括り付けられる火の具体的形状は不明であるが、サムソンの手法から類推するならば、括り付けられたものは松明だと考えられる。

205) 「しっかりと」と訳した箇所は、校訂テキストおよびペイルート版261頁は *mawtūqa* としているが、底本 (L 写本) をはじめとする諸写本の綴りは *muwattaqa* (ないし *mūtaqa*) である。諸写本に従って読む。

206) al-Baq‘a. モスルとナスィービーン (Naṣībīn) の間に広がる地域 (kūra) の名称。中心地はバルカーイド (Barqā‘id) [研究篇：280頁；“al-Baq‘ā,” *Buldān*]。バルカーイドはモスルの北西120km に位置する [Cornu 1985: 16, carte II-F-5]。

207) al-Tartār. 地理書にはスィンジャール (Singār) とタクリートの間を流れる川 (wādī) の名称として言及されている [研究篇：280頁；Le Strange 1905: 98; “al-Tartār,” *Buldān*]。

208) al-Qunayya. マールディーン地方の村 [Hartmann 1916: 508]。

209) Bāšazza. バクア地方、バルカーイド近隣の村 [研究篇：280頁；“Bāšazzā,” *Buldān*]。

210) al-Hattāḥ. マイヤーファーリキーン (Mayyāfāriqīn. トルコ共和国ディヤルバクル県スィルヴァン) 近隣の城塞 [研究篇：280頁；“al-Hattāḥ,” *Buldān*]。

211) Mašhad Ibn ‘Umar. 研究篇280-281頁および Hartmann 1916 [508] は、ティグリス河畔のジャズイーラト・イブン・ウマル (Ġazīrat Ibn ‘Umar. 現在のトルコシリア国境の都市ジズレ) に同定している。Ibn ‘Umar の名称は、都市の建設者とされるタグリブ族の al-Ḥasan b. ‘Umar (250/865年頃没) に由来している [“Ibn ‘Umar, Djazīrat,” EI2]。

212) al-Muwayliḥ. イブン・バットウータがモスルからジャズイーラト・イブン・ウマルに向かう道中で、al-Muwayliḥa という名前の村を訪れている [研究篇：281頁；大旅行記：3巻51頁]。

213) 以上の地名のうち、クナイヤとハッターフは、ナスィービーンよりも北に位置する。ウマリーがバクア地方 (Bilād al-Baq‘a) と呼ぶ地域は、前掲注206で示した地理書による定義よりも北に広がっているようである。

214) Nīnawā. 古代アッシリア帝国の首都としても知られる。ティグリス川を挟んでモスルの対岸 (東岸) に位置する [“Nīnawā,” EI2]。

Mattā) ——彼に平安があらんことを——が〔神によって〕遣わされた町だと言われている²¹⁵⁾。この地方の焦土は、バルトゥッラ²¹⁶⁾とクナイティラ²¹⁷⁾にある。

かつてアリー・パーシャー・ブン・ジージク²¹⁸⁾は、王朝（イル・ハーン朝）の実権を握ったとき、故地（watan）から離れないで済むように、ニネヴェ地方にスルターンの居所となる、栄光に満ちた都市を築くことを決意した。〔しかし、〕定められた死の運命（himām）が彼を襲い、彼の支配は終わった。

焦土全体〔には以下のようなところが含まれる。すなわち〕谷間、野原（maydān）、宿营地（yurt）である。私はその宿营地をアラブ・タイイ²¹⁹⁾で知られる〔地である〕と思う。また、小庵（ṣuwaymi‘a）、バヌー・ザイド（Banū Zayd）で知られた草原、焼き払われた草原、[txt. 292] オイラートの居住地²²⁰⁾である。オイラートの居住地は焦土地帯の辺境でクルドの山（ḡabal al-Akrād）まで〔続き〕、その土地は全て彼らの馬の放牧地であり、彼らの激しい流れが留まる場所である。スインジャール²²¹⁾地方には帯状の土地（mintāq）や見晴らしのよい土地（manzar）、小高い土地（mazīd）があり²²²⁾、〔それらは〕小丘の傍の山々の麓にある。

ジャールの地²²³⁾については、[ms. 127b] 焦土になることはなく、その門を叩くのは善行

- 215) 『旧約聖書』「ヨナ書」を参照のこと。この「ヨナ書」の物語は、ニネヴェという固有名詞は登場しないものの『クルアーン』37章139-148節にも言及されている。ニネヴェが「ヨナの町」であるという認識は、後代のムスリムにも共有されていた [“Ninawā,” EI2]。
- 216) Barṭulla. ティグリス川の東方に位置するニネヴェ地方の村 [研究篇：281頁；“Barṭullā,” *Buldān*]。モスルの東方約20kmに位置する。
- 217) al-Qunaytira. モスルの南方に存在する地名 [Hartmann 1916: 508]。
- 218) ‘Alī Bāšā b. Ġīgik. ペルシア語史料では、しばしばアリー・パードシャー・ブン・チーチュク（‘Alī Pādšāh b. Čīčik）と表記される。オイラート部族の長で、イル・ハーン朝第9代ハーン＝アブー・サイードの母方の叔父にあたる。同朝末期の有力者ジューバーンが失脚した後、バグダードの統治を委ねられた。736/1335年にアブー・サイードが死去した後、チンギス・ハーンの血を引くムーサーをハーンに擁立して一時実権を握った。しかし、その直後の736/1336年にジャラーイル部族の長であったシャイフ・ハサン・カビールとの戦いに敗れ、戦死した [研究篇：281頁；Melville 1999: 16-17, 46-53]。ジューバーンについては訳注（2）57頁注35、シャイフ・ハサン・カビールについては同70頁注120を参照。
- 219) ‘Arab Ṭayy. シリアの有力アラブ部族の一つであったタイイ族のことであろう [“Ṭayy,” EI2]。
- 220) manāzil al-Uwayrātīya. オイラートは、元々チンギス・ハーンの時代にバイカル湖の西の森林に居住していたモンゴル部族。カルムクとも呼ばれる。その一部はフラグの西方遠征に従軍し、イル・ハーン朝成立以降は政治的に重要な役割を果たすようになった。さらにその一部はマムルーク朝領内に移住した [研究篇：281-282頁；“Kalmuk,” EI2]。
- 221) Singār. モスルの西に広がる山地で、そこに建てられた都市の名前でもある。14世紀前半にこの町を訪れたイブン・バトゥータは、その立地や河川と庭園の多さからダマスカスに比している [研究篇：282頁；“Sindjār,” EI2；大旅行記：3巻52-53頁]。
- 222) これらの箇所については、特定の場所を指しているのかもしれないが、地理書など一次史料や研究書等で該当する地名は見当たらなかった。
- 223) Arḍ al-Ġiyāl. 校訂テキストでは al-Ġibāl となっているが、al-Ġiyāl と読んだ。ジャールはスインジャールの村の一つで、アブド・アルカーデイルの息子 ‘Abd al-‘Azīz が移住し、死去した地として知られる [“Kādirīyya,” EI2]。なお、Cornu によれば、スインジャール地方の西南西約30kmに「ジバル（al-Ġibāl）」という地があるという [Cornu 1985: 17, carte II-E-5]。

の人のみであった。なぜなら、そこは、民衆の許でギーラーニーとして知られた我らの主人、シャイフ・アルイスラーム・アブド・アルカーディル・ジーリー²²⁴⁾——神が彼と彼の正しき末裔によって利益を与えんことを——の子孫である、カーディル家の末裔の地だからである。その後裔は双方の地域²²⁵⁾において偉大である。そして、彼らの古よりの父祖と純粹なる高貴さによって、またイスラームとその民のために可能な限り彼らがなした援助によって、彼らは我らの王たちの許で高き地位を有している。

焦土全体の中に〔含まれるものとして〕は、バーザール (bāzār) やスインジャール山の最上部、かの地方²²⁶⁾で〔焦土にすることが〕可能なあらゆるところ、がある。

以上が、心に浮かぶものの全てであり、長い時間を経た後で記憶が呼び起こすものの極限である。それは例 (miṭāl) に過ぎず、教訓 (maṭāl) として語られるものに過ぎない。また、それは日々が私にその多くを忘れさせ、[txt. 293] 私に夢の〔中の〕記憶しか思い出せなくしたものの一つである。以上は、私の技芸が消滅し、私の思考が立ち去り、私の能力が弱まり、失われた〔ときのことであった〕。神は成功を授ける者である²²⁷⁾。

綴りがよく似ていることから、両者は同じ場所を指している可能性がある。

224) ‘Abd al-Qādir al-Ġilī. 12世紀前半に活躍したハンバル派法学者、神学者、説教師、スーフィー (561/1166年没)。カスピ海南西岸のギーラーン (アラビア語ではジーラーン) 地方出身だったため、al-Ġilānī/al-Ġilānī というニスバでも知られる。18歳の時に学問修得のためにバグダードに移り、以降この地で活動した。後に彼を聖者として尊崇する人々を中心となって、スーフィー教団のカーディリーヤが形成された [研究篇: 282頁; “‘Abd al-Kādir al-Djilānī,” EI2]。

225) マムルーク朝領とイル・ハーン朝領を指すと考えられる。

226) マムルーク朝とイル・ハーン朝との国境地帯を指すと考えられる。

227) この段落は内容から考えて跋文のようであるが、諸写本では、この後に第7章が続き、その後に別の跋文が記されている [校訂: 378-379頁]。

参考文献および略称

『高貴なる用語の解説』 活字本

al-‘Umarī, Šihāb al-Dīn Aḥmad b. Yahyā b. Faḍl Allāh. *al-Ta‘rīf bi-al-muṣṭalaḥ al-šarīf*. (『高貴なる用語』)

校訂: *al-Ta‘rīf bi-al-muṣṭalaḥ al-šarīf l-Ibn Faḍl Allāh al-‘Umarī*. (Vol. 2 of *A Critical Edition of and Study on Ibn Faḍl Allāh’s Manual of Secretaryship “al-Ta‘rīf bi’l-muṣṭalaḥ al-šarīf.”*) Ed. Samir al-Droubi. al-Karak: Mu‘ta University, 1992.

ペイルート版: *al-Ta‘rīf bi-al-muṣṭalaḥ al-šarīf*. Ed. Muḥammad Ḥusayn Šams al-Dīn. Bayrūt: Dār al-Kutub al-‘Ilmīya, 1988.

『高貴なる用語の解説』 写本

B: Ms. 8639. Deutsche Staatsbibliothek, Berlin.

D1: Ms. Adab 57. Dār al-Kutub al-Miṣrīya, al-Qāhira.

D2: Ms. Adab 2134. Dār al-Kutub al-Miṣrīya, al-Qāhira.

F: Ms. Arabe 5872. Bibliothèque Nationale, Paris.

L: Ms. 659. Karl Marx Universität, Leipzig. (底本)

Ld: Ms. Or. 352. Universiteit Leiden, Leiden.

S1: Ms. Árabe 1639. Real Biblioteca del Monasterio, Escorial.

S2: Ms. Árabe 1640. Real Biblioteca del Monasterio, Escorial.

Sh: Ms. Add. 7466 Rich. British Library, London.

『高貴なる用語の解説』 訳注

訳注(1): 谷口淳一編「アフマド・イブン・ファドル・アッラー・ウマリー著『高貴なる用語の解説』 訳注(1)」『史窓』67号(2010年): 27-65頁.

訳注(2): 谷口淳一編「アフマド・イブン・ファドル・アッラー・ウマリー著『高貴なる用語の解説』 訳注(2)」『史窓』68号(2011年): 51-94頁.

訳注(3): 谷口淳一編「アフマド・イブン・ファドル・アッラー・ウマリー著『高貴なる用語の解説』 訳注(3)」『史窓』69号(2012年): 19-53頁.

訳注(4): 谷口淳一編「アフマド・イブン・ファドル・アッラー・ウマリー著『高貴なる用語の解説』 訳注(4)」『史窓』70号(2013年): 31-49頁.

訳注(5): 谷口淳一編「アフマド・イブン・ファドル・アッラー・ウマリー著『高貴なる用語の解説』 訳注(5)」『史窓』71号(2014年): 1-24頁.

訳注(6): 谷口淳一編「アフマド・イブン・ファドル・アッラー・ウマリー著『高貴なる用語の解説』 訳注(6)」『史窓』72号(2015年): 63-79頁.

訳注(7): 谷口淳一編「アフマド・イブン・ファドル・アッラー・ウマリー著『高貴なる用語の解説』 訳注(7)」『史窓』74号(2017年): 1-25頁.

訳注(8): 谷口淳一編「アフマド・イブン・ファドル・アッラー・ウマリー著『高貴なる用語の解説』 訳注(8)」『史窓』75号(2018年): 23-44頁.

訳注(9): 谷口淳一編「アフマド・イブン・ファドル・アッラー・ウマリー著『高貴なる用語の解説』 訳注(9)」『史窓』76号(2019年): 21-51頁.

訳注(10): 谷口淳一編「アフマド・イブン・ファドル・アッラー・ウマリー著『高貴なる用語の解説』 訳注(10)」『史窓』77号(2020年): 25-45頁.

訳注(11): 谷口淳一編「アフマド・イブン・ファドル・アッラー・ウマリー著『高貴なる用語の解説』 訳注(11)」『史窓』78号(2021年): 115-145頁.

辞典類

- 古代オリエント事典：日本オリエント学会編『古代オリエント事典』岩波書店，2004年。
Dozy: Dozy, Reinhart Pieter Anne. *Supplément aux dictionnaires arabes*. 2vols. Leyde: E. J. Brill, 1881. Beyrouth: Librairie du Liban, 1981.
EI1: Houtsma, M. Th., et al., eds. *E. J. Brill's Encyclopaedia of Islam 1913-1936*. 9vols. Leiden: E. J. Brill, 1987. Rpt. of *The Encyclopaedia of Islam*, 1913-1938.
EI2: Gibb, Hamilton Alexander Rosskeen, et al., eds. *Encyclopaedia of Islam*. New edition. 12vols. and index volume. Leiden: Brill, 1960-2009.
EI3: Gaborieau, Marc, et al., eds. *Encyclopaedia of Islam, Three*. Leiden: Brill, 2007-.
Hava: Hava, J. G. *Al-Faraid*. 1899. Beirut: Dār al-Mašriq, 1982.
Lane: Lane, Edward William. *Arabic-English Lexicon*. 8vols. London, 1863-1893. Revised ed. 2vols. 1984. Cambridge: The Islamic Texts Society, 2003.
Ramzī: Ramzī, Muḥammad, *al-Qāmūs al-ḡuḡrāfi li-l-bilād al-miṣrīya*, 6 vols., al-Qāhira: Maṭba‘at Dār al-Kutub al-Miṣrīya, 1953-68; al-Qāhira: al-Hay’a al-Miṣrīya al-‘Āmma li-l-Kitāb, 1994.

史料・史料訳注

- イブン・ジュバイル：イブン・ジュバイル『イブン・ジュバイルの旅行記』藤本勝次・池田修監訳，講談社〈講談社学術文庫〉，2009年。
クルアーン（井筒訳）：『コーラン』井筒俊彦訳，改版。全3冊，岩波書店〈岩波文庫〉，1964年。
クルアーン（中田ほか訳）：『日亜対訳クルアーン』中田香織・下村佳州紀訳，中田考監修，作品社，2014年。
クルアーン（藤本ほか訳）：『コーラン』藤本勝次ほか訳。全2冊，中央公論新社〈中公クラシックス〉，2002年。
クルアーン（三田訳）：『日亜対訳・注解 聖クルアーン』[三田了一訳]，改訂版，日本ムスリム協会，1982年。
聖書：『聖書——新共同訳—旧約聖書続編つき—』共同訳聖書実行委員会 [訳]。日本聖書協会，1987年。
大旅行記：イブン・バットウータ『大旅行記』イブン・ジュザイイ編，家島彦一訳注，全8巻，平凡社〈東洋文庫〉，1996-2002年。
Bidāya: Ibn Kaṭīr ‘Imād al-Dīn Ismā‘īl b. ‘Umar al-Dīmašqī. *al-Bidāya wa al-nihāya*. 20vols. Bayrūt: Dār Ibn Kaṭīr, 2010.
Buldān: al-Ḥamawī, Šihāb al-Dīn Yāqūt b. ‘Abd Allāh. *Mu‘ḡam al-buldān*. Ed. F. Wüstenfeld. 6vols. Leipzig: Der deutschen morgenländischen Gesellschaft, 1866-1873. Tehrān, 1965.
Ibn Ḡubayr: Ibn Ḡubayr, Abū al-Ḥasan Muḥammad b. Aḥmad. *Taḍkira bi-al-aḥbār ‘an ittifaqāt al-asfār (Riḥlat Ibn Ḡubayr)*. Ed. William Wright. 1852. 2nd and rev. ed. M. J. De Goeje. Leiden and London: E. J. Brill, 1907. Frankfurt am Main: Institute for the History of Arabic-Islamic Science at the Johann Wolfgang Goethe University, 1994.
Šubḥ: al-Qalqašandī, Šihāb al-Dīn Aḥmad b. ‘Alī. *Šubḥ al-a‘šā fi šinā‘at al-inšā’*. 14 vols. al-Qāhira, 1913-1920. al-Qāhira: Wizārat al-Ṭāqāfa wa al-Iršād al-Qawmī, 1963.
Ṭabaqāt/Subkī: al-Subkī, Taḡ al-Dīn ‘Abd al-Wahhāb b. ‘Alī. *Ṭabaqāt al-šāfi‘īya al-kubrā*. Ed. Maḥmūd Muḥammad al-Ṭanāḥī et al. 10vols and index volume. al-Qāhira, 1964-1976. Ġīza: Haḡr, 1992.
Taqwīm: Abū al-Fidā’, ‘Imād al-Dīn Ismā‘īl b. Muḥammad. *Taqwīm al-buldān (Géographie d’Aboulféda)*. Ed. Joseph Reinaud and Mac Guckin de Slane. Paris: Imprimerie Royale, 1840.
Wāfi: al-Šafadī, Šalāḥ al-Dīn Ḥalīl b. Aybak. *al-Wāfi bi-al-wafayāt*. Eds. Helmut Ritter et al.

32vols. Wiesbaden: F. Steiner, et al., 1931-2013.

Zubdat kaşf: Ḥalīl b. Šāhīn al-Zāhīrī, *Kitāb Zubdat kaşf al-mamālik wa-bayān al-ṭuruq wa-al-masālik*. Ed. Paul Ravaisse. Paris: Imprimerie Nationale, 1894. Frankfurt am Main: Institute for the History of Arabic-Islamic Science at the Johann Wolfgang Goethe University, 1993.

研究

五十嵐大介 『中世イスラーム国家の財政と寄進——後期マムルーク朝の研究——』 刀水書房, 2011年.

本田実信 『モンゴル時代史研究』 東京大学出版会, 1991年.

Abu-Sitta, Salman H. *The Atlas of Palestine, 1917-1966*. London: Palestine Land Society, 2010.

al-Baqlī, Muḥammad Qindīl. *al-Ta'rif bi-muṣṭalahāt Šubḥ al-a'šā*. al-Qāhira: al-Hay'at al-Miṣriya al-‘Āmma li-l-Kitāb, 1983.

Burns, Ross. *Monuments of Syria: An Historical Guide*, London and New York: I.B. Tauris, 1992.

Cornu, Georgette. *Atlas du monde arabo-islamique à l'époque classique*. Leiden: E. J. Brill, 1985.

al-Droubi, Samir. *A Critical Edition of and Study on Ibn Faḍl Allāh's Manual of Secretaryship "al-Ta'rif bi'l-muṣṭalah al-sharīf."* 2vols. al-Karak: Mu'ta University, 1992. (『高貴なる用語』のテキストが収められている巻は「校訂」、作品研究の巻は「研究篇」と略称。)

Dussaud, René. *Topographie historique de la Syrie antique et médiévale*. (Haut-commissariat de la République Française en Syrie et au Liban. Service des antiquités et des beaux-arts. Bibliothèque archéologique et historique, t. 4) Paris: Librairie Orientaliste Paul Geuthner, 1927.

Dussaud, René. *La Syrie antique et médiévale illustrée*. Paris: Geuthner, 1931.

Halm, Heinz, *Ägypten nach den mamlukischen Lehensregistern*, 2 vols., Wiesbaden: Dr. Ludwig Reichert Verlag, 1979-1982.

Hartmann, Richard. "Die Straße von Damaskus nach Kairo," *Zeitschrift der Deutschen Morgenländischen Gesellschaft* 64 (1910): 665-702.

Hartmann, Richard. "Politische Geographie des Mamlūkenreichs: Kapitel 5 und 6 des Staatshandbuchs Ibn Faḍlallāh al-‘Omārī's," *Zeitschrift der Deutschen Morgenländischen Gesellschaft* 70 (1916): 1-40, 477-511, 71 (1917): 429-430.

Humphreys, R. Stephen. *From Saladin to the Mongols: the Ayyubids of Damascus, 1193-1260*. Albany: State University of New York Press, 1977.

Le Strange, Guy. *Palestine under the Moslems: A Description of Syria and the Holy Land from A.D. 650 to 1500*. Boston and New York: Houghton, Mifflin and Company, 1890. New York: AMS Press, 1975.

Le Strange, Guy. *The Lands of the Eastern Caliphate*. Cambridge: The University Press, 1905. New York: Ams Press, 1976.

Mazor, Amir. *The Rise and Fall of a Muslim Regiment: The Maṣūriyya in the First Mamluk Sultanate, 678/1279-741/1341*, Bonn, 2015.

Melville, Charles. *The Fall of Amir Chupan and the Decline of the Ilkhanate, 1327-37: A Decade of Discord in Mongol Iran*. Bloomington: Indiana University, Research Institute for Inner Asian Studies, 1999.

Oppenheim, Max von. *Vom Mittelmeer zum Persischen Golf: durch den Haurān, die syrische Wüste und Mesopotamien*. 2vols. Berlin: Reimer, 1899-1900.

Popper, William. *Egypt and Syria under the Circassian Sultans, 1382-1468 A.D.: Systematic Notes to Ibn Taghrī Birdī's Chronicles of Egypt*. Berkeley and Los Angeles: University of California Press, 1955.

- Ragheb, Youssef. *Les messagers volants en terre d'islam*. Paris: CNRS Éditions, 2002.
- Robinson, Edward and Eli Smith. *Palästina und die südlich angrenzenden Länder: Tagebuch einer Reise im Jahre 1838 in Bezug auf die biblische Geographie unternommen von E. Robinson und E. Smith*. 3 vols. in 4. Halle: Buchhandlung des Waisenhauses, 1841-1842.
- Salibi, Kamal S. *Maronite Historians of Mediaeval Lebanon*. Beirut: American University of Beirut, 1959.
- Sauvaget, Jean. "Caravansérails syriens Moyen-Âge II: Caravansérails mamelouks," *Ars Islamica* 7. 1 (1940): 1-19.
- Silverstein, Adam J. *Postal Systems in the Pre-Modern Islamic World*. Cambridge: Cambridge University Press, 2007.
- Wild, Stefan. *Libanesische Ortsnamen: Typologie und Deutung*. Beirut: Orient-Institut, 1973.
- Willey, Peter. *Eagle's Nest: Ismaili Castles in Iran and Syria*. London: I.B. Tauris, 2005.
- Winter, Stefan. *The Shiites of Lebanon under Ottoman Rule, 1516-1788*. Cambridge: Cambridge University Press, 2010.